



359  
533



始



525

現代新語編  
式辭及演說編  
現代文藝編  
處世修養編  
現代就職編  
座談及社交編  
習字及書簡編

願屆書式編  
小資本活用編  
日常禮儀作法編  
衛生治療編  
男女性愛編  
男女美容編  
家庭園藝編  
金錢利殖編

● 行發院書民國 ●

231  
135

# 國民百科大辭典 目次

第一輯	現代新語編
第二輯	式辭演說編
第三輯	現代文藝編
第四輯	處世修養編
第五輯	現代就職編
第六輯	座談及社交編
第七輯	習字及書筒編

第八輯	願届書式編……………
第九輯	小資本活用編……………
第十輯	日常禮儀作法編……………
第十一輯	衛生治療編……………
第十二輯	男女性愛編……………
第十三輯	男女美容編……………
第十四輯	家庭園藝編……………
第十五輯	金錢利殖編……………

目次終り

現代新語編

【イ】

- イズム【主義】
- インチ【吋】
- インパネス【短外套】
- インデツキス【索引】
- インフルエンザ【流行性感冒】
- イクオール【等】
- イルミネーション【點燈裝飾】

- インターロゲンションマーク【?】
- イエス【然り】

【ロ】

- ローズ【薔薇】
- ロソテニス【庭球】
- ローマンス【情的物語】
- ローマンチツク【感傷的、空想的】
- ハム【肉漬】
- ハート【心臟】
- ハンマー【鐵槌】

ハイ・カーラ 【高襟】  
ハンモツク 【網床】  
ハンドル 【把手】  
ハスバンド 【夫】  
ハンド・フツク 【便覧】  
ハンカチーフ 【手巾】  
パン 【麵麴】  
バンク 【破裂】  
パニック 【恐慌】  
パテント 【特許登録】

バラフィン 【硝子紙】  
バナナ 【椰子の實】  
バナマ 【夏帽原料】  
バス 【無賃乗車券】  
パイプ 【煙管】  
バイナツブル 【菓實】  
バラダイス 【樂園】  
バルコニー 【露臺】  
パーク 【公園】  
パノラマ 【實畫】

パー・セント 【%百分率】  
バー 【酒場】  
バタ 【牛酪】  
バラツク 【假屋】  
バケツ 【洋桶】  
バランス 【均合】  
バイブル 【聖書】  
バチルス 【黴菌】  
バクテリア 【細菌】  
バーゲンデー 【廉賣日】

バザール 【慈善市】  
バンク 【銀行】  
バツク 【背景】  
バラメーター 【晴雨計】  
バスケット 【籠靴】  
バイオレット 【薰】  
バンドー 【帶】  
【ニ】  
ニコチン 【煙草毒素】  
ニツケル 【洋銀】

ニューシ・ペーパー【新聞紙】

【ホ】

ホーム【家庭】

ホテル【旅館】

ホール【會館】

ホームムン【新婚旅行】

ホスピタル【病院】

ホルマリン【防腐殺菌劑】

ホームシツク【懷郷病】

ポール紙【馬糞紙】

ボーイ【給仕】

ボイラー【錫釜】

ボート【端艇】

ボーナズ【賞與金】

ボルドー【葡萄酒】

ボギー車【電車列車】

ボツクス【座席】

ボイコツト【同盟反抗】

ボタン【釦】

ボンド【封度】

ポンプ【唧筒】

ポテト【馬鈴薯】

ポリス【警官】

ポスター【廣告繪看板】

ポスト【郵便箱】

ポケット【懷中】

ポスト・カード【郵便葉書】

ポケット・マネー【小使錢】

ボンネット【婦人羽帽】

ポート・ワイン【葡萄酒】

ポルシエギキイ【過激派】

【へ】

ヘット【牛酪】

ヘルメット【變形夏帽】

ペン【筆】

ペンキ【番瀝書】

ページ【頁】

ペスト【黒死病】

ペーパー【紙】

ベル【鈴】

ベルモツト 【洋酒】  
ベスト 【最善】  
ベンチ 【腰掛】  
ベルト 【調帯】  
【ト】  
トン 【噸】  
トンネル 【隧道】  
トマト 【赤茄子】  
トロール船 【漁獵船】  
トラスト 【企業家同盟】

トタン 【亜鉛板】  
トランク 【旅行鞆】  
トランプ 【西洋骨牌】  
トラホーム 【傳染性結膜炎】  
ドア 【扉】  
ドック 【渠】  
ドラム 【戲曲】  
ドクター 【博士】  
ドクトル 【醫師】  
ドクトル・オア・アーツ 【醫學士】

ドクトル・メチーネ 【醫學博士】  
ドンス 【緞子】  
【チ】  
チース 【乾酪】  
チツブ 【心付】  
チツキ 【合符】  
チエツク 【民族】  
チヤンス 【機會】  
チケツト 【切荷】  
チャーム 【魔力】

チレンマ 【板挾】  
チヨコレート 【飯料】  
チヤンピオン 【選手】  
チユーイン・ガム 【菓子】  
【ツ】  
ツレード・マーク 【商標】  
ツエツペリン 【飛行船】  
ツベリクリン 【組核療法】  
【リ】  
リリー 【百合】

リーター 【模範】  
リング 【輪】  
リンネル 【亞麻系】  
リズム 【音律】  
リットル 【容積單位】  
リボン 【平絹紐】  
【ル】  
ルビ 【傍訓】  
ルーター 【一地名】  
ルーフル 【露貨】

ルビー 【寶石】  
ルナ・パーク 【遊園】  
ルーラー 【丸定木】  
ルーデ・サツク 【防囊】  
ルネツサン 【文藝復興】  
ルーズリーフ 【差替帖】  
【オ】  
オーライ 【諾】  
オフセット 【護謄寫真印刷】  
オレンヂ 【飯料】

オートミール 【挽割燕麥】  
オートバイ 【自働車自轉車】  
オーヴァコート 【外套】  
オーヴァシューズ 【外靴】  
オーヴァフリツチ 【外橋】  
オリチナルテイ 【獨創的】  
オーソリティー 【威權】  
オリーヴ 【綠色】  
オフラート 【藥用煎餅】  
オペラ 【歌劇】

オペラグラス 【觀劇眼鏡】  
オペラバツク 【觀劇手提靴】  
オーケストラ 【大合奏】  
オーロラ 【極光】  
オゾン 【酸素氣】  
オンス 【匁】  
オルガン 【樂器名】  
【ワ】  
ワットマン 【上等製圖用紙】  
ワイフ 【妻】



ワツブル 【菓子】  
ワイン 【洋酒】

【カ】

カラー 【色】  
カロリー 【熱量單位】  
カーバイト 【炭化石炭】  
カフェー 【喫茶店】  
カラット 【黄金品位】  
カット 【挿畫】  
カーテン 【窓掛】

カタログ 【營業目錄】

カーネーション 【西洋草花名】

カンテラア 【粕底羅】

カンナ 【西洋草花名】

カンニング 【不正行爲】

カボンベーパー 【炭素紙】

カメラ 【寫真機】

カレンダー 【柱懸曆】

カントル 【手燭】

カナキン 【金巾】

カード 【紙札】

ガイド 【通辯】

ガス 【瓦斯】

ガーゼ 【白布】

カタル 【加答兒】

カバン 【鞆】

カルシウム 【石灰質】

【ヨ】

ヨット 【快走艇】

ヨード・チンキ 【沃度丁幾】

ヨードフォルム 【沃度防護】

【タ】

タオル 【手拭】

タイム 【時間】

タイムスタンプ 【時間印刷器】

タイムス 【時報】

タクシー 【辻自動車】

タフレット 【標器】

タイプライター 【印字器】

タンク 【大槽】

タバコ 【煙草】  
タービン 【渦輪發動機】  
タンダステン 【電燈元素】  
タイヤ 【護謨輪】  
タイピスト 【印字器手】  
タース 【打】  
ダイナモ 【發動機】  
ダイナマイト 【爆烈彈】  
ダンス 【舞踏】  
タリヤ 【天竺牡丹】

ダイヤモンド 【金剛石】  
ダブル・カラー 【二重折襟】  
【レ】  
レース 【毛紐】  
レヴェル 【水平線】  
レターペーパー 【手紙用箋】  
レコード 【記録】  
レストーラン 【料理店】  
レディー 【貴婦人】  
レツテル 【貼紙】

レール 【軌道】  
レンズ 【鏡】  
レッド 【赤】  
レモン 【常緑樹】  
レインコート 【防雨外套】  
レントゲン線 【X光線發明者の名】  
レコンストラクション 【改造】  
【ソ】  
ソファ 【寢椅子】  
ソフト 【上質毛】

ソーダ 【曹達】  
【ネ】  
ネル 【毛織】  
ネクタイ 【襟飾】  
ネーブル 【柑橘】  
【ナ】  
ナイフ 【小刀】  
ナフキン 【拭巾】  
ナンバン 【番號】  
ナショナル 【國民的】

ナフタリン 【防腐劑】

ナチュラル 【自然的】

【ラ】

ラフ 【戀】

ライフ 【生活】

ライン 【線】

ラシヤ 【羅紗】

ランプ 【洋燈】

ラケット 【打球器】

ラツバ 【喇叭】

ライオン 【獅子】

ランチ 【辨當】

ランチ 【小蒸汽船】

ラージ 【麥】

【ウ】

ウーラ 【萬歲】 露語

ウーマン 【婦人】

ウエルカム 【歡迎】

ウォーター・クロゼット 【便所】

ウ井スキー 【強酒】

ヴェランダ 【廊子】

ヴェール 【薄絹】

ヴウロツタ 【吸收器】

【ノ】

ノー 【否】

ノツク 【音】

ノット 【海里】

ノートブック 【手帖】

ノーベル賞金 【賞金名】

ノンセンス 【然價值】

ノーテイス 【注意】

ノーブル 【高尚】

【ク】

クラス 【級】

クロース 【布表紙】

クツク 【料理人】

クローバー 【馬こやし】

クリツプ 【紙挾】

クリスマス 【基督降誕祭】

クラブ 【俱樂部】

クリーニング【乾燥洗濯】  
クリーム【乳粉】  
クーホン【切取印刷】  
グラウンド【運動場】  
クレオソール【殺菌薬】  
【ヤ】  
ヤード【長さ単位】  
ヤンキー【米人異名】  
【マ】  
マント【外衣】

マイル【哩】  
マアク【商標】  
マーク【馬克】  
マネチャール【支配人】  
マキスム【格言】  
マイナス【減號】  
マツチ【隣寸】  
マチネー【晝間劇】  
マスター【上長】  
マダム【夫人】

マーチ【進行】  
マツサーシ【西洋按摩】  
マネ【貨幣】  
マスク【假面】  
マスタートオファーツ【米國文學士】  
マラソン・レース【長距離競争】  
マスト【帆柱】  
マーチャント【商人】  
マグネシウム【寫真用强光熱】  
マガジン【雜誌】

【ケ】  
ケント【製圖用紙】  
ケース【函】  
ゲーム【勝負】  
【フ】  
フライ【揚物】  
フラン【佛貨】  
フオーク【肉刺】  
フラスコ【玻璃瓶】  
フィルム【映畫】

フット・ボール 【蹴球】  
プレミアム 【割増金】  
ブライド 【誇】  
フロバカンタ 【宣傳】  
プログラム 【順序書】  
フロマイド 【不變色寫眞】  
プロペラー 【推進器】  
ブラチナ 【白金】  
ブラットホーム 【外廓】  
ブラクチカル 【實用的】

プラス 【十加號】  
フランデー 【火酒】  
フローカー 【仲介業】  
フレキー 【制動器】  
フラツク 【黑色】  
フリキ 【鐵葉】  
フツク 【書籍】  
フリツチ 【橋】  
【コ】  
コザツク 【哥薩克】

コスメチツク 【練油】  
コンボジション 【構圖】  
コード 【網】  
コツプ 【洋盃】  
コツビ 【復寫印刷】  
コンマ 【符號】  
コンパス 【兩脚器】  
コンパニー 【仲間】  
コンストラクシヨン 【組立】  
コーヒー 【珈琲】

ココア 【飯料】  
コカイン 【局部麻醉劑】  
コバルト 【藍色】  
コレラ 【虎列刺】  
コールター 【黑色防腐劑】  
コンモンセンス 【常識】  
コロタイプ 【寫真版】  
コーラス 【合唱】  
コンクリート 【混凝土】  
コンペイトウ 【金米糖】

コントラスト 【対照】  
コンミツシヨン 【手数料】  
コンデンス 【精練】  
ゴツド 【神】  
ゴシツブ 【埋草】  
ゴシツク 【直線的】  
コロツケ 【洋食名】  
コスモス 【西洋花名】  
コルレスポテンス 【爲替取引先】  
コスモポリタニズム 【世界主義】

コールマネー 【保證貸付金】  
ゴム 【護謨】  
コウモリ 【洋傘】  
【エ】  
エキス 【精】  
エツキス 【光線】  
エンゼル 【天女】  
エーヤ・マン 【飛行家】  
エナメル 【瑛瑯】  
エメラルド 【綠寶石】

에스ペラント 【世界語】  
 エネルギー 【精力】  
 エブロン 【前掛】  
 エピソード 【挿話】  
 エボナイト 【人造硬化護謨】  
 エレベーター 【自動昇降機】  
 エスカレーター 【自動梯子】  
 エム・シー・シー 【エジプト草】  
 エンゲージ 【婚約】  
 エフィシエンシー 【能率増進】

エンサイクロペチア 【百科全書】  
 エーカー 【四反十八步餘】  
 エツセンス 【素要】  
 エゴイスト 【自己主義】  
 エクスクラメーションマーク 【！】  
 エンジン 【發動機】  
 【テ】  
 テール 【清貨兩】  
 テニス 【庭球】  
 テーフルスピチー 【卓上演説】

テーブル【平紐】  
デッサン【素描】  
テキケート【織細】  
デスク【机】  
デカタン【耽溺】  
デレタント【享樂派】  
デツキ【甲板】  
デモクラシー【民衆主義】  
デザートコース【食後茶果間】  
デパートメント・ストア【百貨商店】

【ア】  
アーチ【綠門】  
アート【藝術】  
アーメン【祈禱】  
アンダー・ライン【忘備線】  
アイロン【熨斗】  
アフト【アフト式】  
アルコール【酒精】  
アパートメント・ストア【蜂窩館】  
アルバム【寫真帖】

アートペーパー【光澤洋紙】  
アネモネ【西洋花名】  
アイロニー【皮肉】  
アイデア【理想】  
アルボース【防毒劑】  
アンビション【野心】  
アラビヤ數字【12345……】  
アイボリー【上質洋紙】  
アルバカ【羊駝】  
アクセント【調子】

アンチピリン【解熱劑】  
アセチリン【點大氣】  
アルファベット【英語母字】  
【サ】  
サボタージュ【怠業】  
サボン【石鹼】  
サツカリン【砂糖三百倍の甘味】  
サイダー【清涼飲料】  
サツク【囊】  
サーチライト【探海燈】

サムシング 【或物】  
サンタ・クローズ 【老翁名】  
サイン 【印】  
サイエンス 【科學】  
サラリ 【給料】  
サイエンティフィック・マネージメント 【科學的經營】  
サラリ・マン 【會社員】  
サイズ 【寸法】  
サラサ 【更紗】  
サーベル 【洋劍】

サンプル 【見本】  
サルバルサン 【六百六號】  
【キ】  
キネマ 【活動寫眞】  
キリスト 【基督】  
キュービット 【愛の神】  
キツス 【接吻】  
キヤラメル 【飴菓子】  
キヤツシユレジスター 【金錢登録器】  
キヤビネット 【繪葉書】

キヤツチフレース 【惹句】  
【メ】  
メモ 【備忘箋】  
メーター 【計量計】  
メタル 【記念章】  
メス 【解剖刀】  
メリヤス 【莫大小】  
メルトン 【羊毛地名】  
メランコリ 【憂鬱】  
メニニー 【献立表】

メツセンジャボーイ 【自轉車給仕】  
【ミ】  
ミス 【令嬢】  
ミルク 【乳】  
ミリタリズム 【軍國主義】  
ミリメートル 【三尺三寸】  
ミスター 【君】  
【シ】  
シエクハンド 【握手】  
シャンペン 【三鞭酒】



シンプル【簡單】  
シンボル【表象】  
シーン【場面】  
シヨツク【激動】  
シチユー【西洋料理名】  
シカー【葉巻煙草】  
シヨウウ井ンド【陳列窓】  
シルク・ハット【絹帽子】  
システム【組織】  
ジャパン【日本】

ズボン【筒袴】  
シャツチ【襯衣】  
〔ヒ〕  
ヒステリー【神經質性】  
ヒボコンデリー【憂鬱病】  
ヒロイ【主人】  
ヒロイン【女主人】  
ヒント【暗示】  
ビラウド【天鵝絨】  
ビール【麥酒】

ビヤ・ホール【洋食店】  
ビスケツト【菓子名】  
ビイドロ【硝子】  
ビユーター【美人】  
ビチネス【商業】  
ビチネス・マン【商業家】  
ピアノ【樂器名】  
ピン【留針】  
ピンセット【挾器】  
ピンボン【室内遊戯】

ピアノリスト【樂器手】  
ビストル【拳銃】  
ビーオービー【寫真藥機】  
ビツチ【球手】  
ビル・フローカー【手形仲立人】  
〔モ〕  
モーター【發動機】  
モーニング【洋服名】  
モデル【模型】  
モザイク【模細工】

モルヒネ 【莫爾比涅】  
 モータ・ボート 【發動機艇】  
 モーメント 【瞬間】  
 モスリン 【唐縮緬】  
 【セ】  
 セル 【手織布】  
 セロ 【零〇】  
 センチユリー 【一世紀】  
 セコンド 【秒音】  
 セルロイド 【人造護謄】

センチメンタル 【感傷的】  
 セミコロン 【符號；】  
 セレクション 【選擇】  
 セーフティー・ファースト 【安全第一】  
 セントルマン 【紳士】  
 ゼラチン 【精膠】  
 セツセツション 【直線的】  
 【ス】  
 スター 【星】  
 ステロ 【鉛版】

スタイル 【型】  
 スタート 【出發點】  
 スタンプ 【刻印】  
 スポイト 【注入器】  
 ストツブ 【止れ】  
 スケッチ 【寫生】  
 スカート 【裾】  
 スキー 【雪滑靴】  
 ストープ 【煖爐】  
 スチーム 【蒸氣】

ス井ツチ 【電氣開閉器】  
 ス井・トホーム 【新家庭】  
 スコツチ 【硬毛布】  
 スピード 【速度】  
 スピリット 【精神】  
 スベル 【綴字】  
 ストライキ 【同盟罷工】

現代新語編 (終)



## 式辞及演説編

### ○新年宴會の式辭

一陽來復して歲華茲に改まり、瑞雲蒼穹に變遷し、祥氣四海に溢る、庶民各其の堵に安んじて祝酒に酔ひ、泰平を謳歌す、是れ實に聖代の鴻恩餘澤にあらずして何んぞや。然り而して吾人、生を此の聖代に享け、斯も至慶至福を共にするを得、洵に感佩欣謝の至りに堪へざるなり、此の光榮に充てる歳首に當り、和氣鬪々の裡に本日を下して、同志の士茲に會し、歲華革新の賀宴を開催して、益々親交を厚ふし、同心協力以て福利幸運を増進せむとさるゝは天下何物か之れに勝るの快事あらむや。思ふに平和克復後の社會は、其の發達偉大にして、従つて吾人の處世上に急激の變調を來すこと無しと云ふべからず、故に吾人の志慮計畫を要することの多大なるは固よりなりとす、然らば愈々親交を重ね互ひに智識の交換に努めて、長短相助くるは常に吾人の幸福なるのみならず、亦た洵に邦家の爲めに祝賀すべきことならずや、希はくば義を以て交り徳を以て親むの諸士、益々健康を貴び誓つて進歩發展を期せられむことを不肖辛ひに舊交を辱なふせるを以て此の光輝ある賀宴の末席に班し、諸士と共に今日の祝福を願ち、交情をして多々温厚ならしむるを得たるは衷心より欣喜に堪へざる所なり、茲に

謹みて聖書の萬歳を三唱し奉り併せて諸士の萬福を祈る。

○新年宴會席上の演説

諸君よ茲に諸君と共に、最も希望に充る此の新たな年を迎へ得ましたのは、大慶大賀の堪へぬ次第であります、のみならず、斯る目出度と氣霽然たる一堂の裡に相會して、歳首の祝宴を開き、互ひに杯を擧げて舊交を温め懇親を重ねて、將來の福利を圖り發展を談せんと致しまするのは、實に無上の愉快なることではござりませぬか、私は身に餘る光榮として、衷心より深く感謝の意を表する次第であります。

さて諸君、人生は恰も逆旅のごとく、夕の泊り今日のふみだしで、即ち一年の始め終りは、一日一夜の旅のやごとく、少しも異なることはないものであります、三百六十五日で長い月日の間には、悲しいこともあれば、又た嬉しいこともあつたに違ひありません左様かと思へば困難な事もあれば、昇達したこともありましたらう、けれども觀じてみれば、之れも亦た夕の夢に過ぎないのであります、そこで一夜あれば、何うです、東の空には紫の雲がひらけて、日光がきらめき渉る、天然の森羅萬象も自然と新たになつて山も笑へば川も音楽を奏るし、而して霜にうたれた草木も蟲けらまでも、又た自から新しい生活を帶てまゐります期して人生は亦た茲に新しい一年のふみ出を始めて、此の困難の横はれる趣味の多い世界に向つて、進んでゆかねばなりませんので、と

に人間が年を一つ取れば、經驗も増して參りますし、智識も開けて來ますからして、吾日は険しい山坂を登るのに蹉づいて足を痛めたこともありましたが、今日は最早や再び其れを繰返してはなりませんので其の代り又た如何なる難所に出會ふかも知れませぬば、私は諸君と共に此の新らしい旅のふり出には、能く能く心せねばならぬこと、深く考へるのであります、思ふに此の考へだに間違なんだならば、得るところ決して少なくないでせう、今日擧る祝杯は新年なるが故に、愉快に飲んで愉快に酔ふて大いに歌へ下、なご、云ふ無意味なものでは無く新年なるが故に、必らず新なる覺悟新なる決心を以て、其の希望に對し、飛躍發展の計畫を立て、而して其の前途を祝福する爲めであらう、否な其れが爲めに擧る大杯であるのです、諸君、世界の戦雲は全く散じて、春風駘蕩の世と成りましたが、其の代りに平和の戦争は、多々猛烈を加へて來ますから、吾人は大いに奮闘努力を養成して、作戦の計畫に熱中せねばなりません、其れ故に此の新らしい旅のふみ出に、大いに心して精神に武装を整へ平和戦の捷利を獲得すべく猛進奮闘する覺悟が最も大切であらうと考へられます、否な滿堂の諸君も必らず私と御同感なるに相違ないと確信いたしますから、今後益々親善を重ね、愈々振つて進歩發展を期するやうに致したいと私は切望いたします、此の最も光輝ある賀宴の席末に列するの光榮を得ましたる欣喜の餘り、失禮を顧みず、一片の所存を披瀝して、妄りに贅言を述べ

謹んで諸君の健康を賀し、併せて多々益々福利好運の來たらんことを切に祈るのであります。

○忘年會開會の式辭

夫れ人事の多忙なる三百六十五日の長日月中、知人親交と一堂に集合して、快談壯語するの機會能く幾回である、一年は一瞬の如し、本年も將に終を告んとす、光陰は矢の如しの語吾人をして轉た夢幻の感あらしむ會て諸君と共に花に酔ひて落花狼藉を極めたる殺風景、月に吟じて詩人雅學を模倣したる清遊など、今何處にかある、既往の事を回想すれば朦朧として眼前に髣髴たるも、既に去つて今や曆日を剩すこと僅かに數日となれり嗚呼光陰は流水の如く杳々として去つて復た還らず、思ふに限あるの生命を以て限なきの事業に従ひ、夙夜營々逐々として寸時も精神の休息を得ず、實に夢幻の中に年を迎へ年を通りて身の老るを知らず豈慨嘆の至りならず、や蓋し是れ人生の状態ならずも、斯のごとき事を徒らに嘆じて止めがたき光陰の推移を恨むごときは、薄志弱行の徒ならずや、故に吾人は將に來たらんとする新たなる年と共に、既往を追懷せずして更に新らしき勇氣と精力とを振ひ、大活躍を試み、將來の光明のみに向ひて猛進し、最終の美を飾らざれば死すとも奮闘を止めずとの大覺悟なからざるべからず、是れ諸君と共に本日茲に忘年の宴を開く所以なり、今開宴に際し聊か所感を陳べて式辭とし、併せて諸君の

健康と來む年の幸多からんことを祈る。

○忘年會開會の挨拶

諸君今日は一日が、せめて三十時間もあれば可いが、と愚痴を並べたくなる年末の御多用中なるにも拘はらず、貴重なる時間を割愛されて、斯く多數打ち揃はれ、御來會下さいまして、發起同人の深く光榮とし、欣謝いたすところでありませう、何分斯る折柄の設備でございませうので、不行届の段は、發起人に於て深謝いたします、ごうぞ、十分に打ち寛ぎて舊を送り新を迎ふる、此の會合に、滿腔の氣焰を吐露されたいのであります、尙ほ慾には隠し藝や、他處行き藝などを、惜氣なく公開されて、忘年會の目的を、遺憾なく發揮されんことを願ひいたします、開會に際し、一寸と、一言私より諸君に御挨拶申し上げます。

○忘年會席上の演説

只今發起人某君の御挨拶にも在りました通り、平生取分け懇親を重ねおしひに兄たりがたく弟たりがたく相佐け合ひて、奮勉活動せる我々が何等の悉もなく、斯く一堂に會して一夕の歡樂を盡しまするのは御同前に慶賀欣喜の至りでありまして、又た之れほど愉快な事はござりませうまい。

さて諸君此の種の會合を忘年會と稱ふるは、如何なる意味でありませうか……何んだか

議論めいて來すが……之れには色々の解釋を下す人がありますが、多くは字義通り年を忘るゝ會合だと云ふ、然りとしてみたらば、年を忘れんとする其の人に取うては喜ばしからざりし事の多かりし即ち、不吉なる事の多かりし年を忘れても宜しいが、本年のごとく御同前に取うては順調に向ひて愉快なる事のみ、打ち續きたる年を忘れよとは矛盾した話で、毫も意味を爲さぬのであります、斯る年は生涯に忘れたくとも忘られないのではありませんか、如何です……又た或る人は忘年とは、決して曆の年を忘れよと云ふ意ではない、自己の年を忘れて勇往邁進己の爲すべき事に向うて奮闘せよと云ふ意味であると解釋された、成るほど己の年齢を超越して己の自分を盡せよと云ふ意味でありますから、私は此の方の解釋に敬服してをるので御座います、故に私等のごとき初老に入りたる者も、諸君のごとき新進銳氣の壯青年諸君も、各自の年齢を超越して、年の老きたることなどには何等氣を腐らすことなく、何時も元氣旺盛で働けよと云ふことになりますですから、私は此の解釋に敬服してをるので御座います。

諸君も私と同様第二の解釋に御賛成であらうと考へられます、諸君齡已耳順に近き老境に入りたる人に、壯者を凌ぐ大政治家大學者大實業家の甚だ多きは、蓋し年齢を超越して事に當るの信念覺悟を以て、多年の修養を積れたる結果であらうと思はれます。されば諸君よお互ひに各自の年齢を超越して、年寄たることなどに氣を腐らすのごとき

女々しきことなく、目出度き來む新年を迎ふると共に更に心身を新清にして、一段諸君各自の職務、奮闘努力されむことを切望いたしまするのであります、斯のごとくにして此の忘年會なるものは實に多趣味多教訓なる幸ある會合として、我々の年末を飾ることであらうと、想ひ謹んで一言御挨拶を述べます。

○結婚披露宴の祝辭

維時大正何年×月×日赤繩空しからず正に本日吉辰をトして、我が友某君と某嬢と、華燭の祝典を擧る、銀燭熒々として堂に輝やき、瑞雲洋洋として場に溢る、豈人生の慶事之より大なるものあらむや、不肖何んたるの幸ぞ、亦た招かれて此の瓊筵に陪するの光榮を得たるは、蓋し不肖一生の面目之れに過ぐるものなく深く本日を記念すべきなり。某君は曩に高等商業學校を、優等の成績にて卒業されたる秀才の聞へ高き人にして、又た某嬢は女學校を首席にて出でられたる才色兼備の淑女なり、斯る有數の才子佳人が、之れより新たなる家庭を作られて、公私の事業に活動されんとするは、嘗に某君某嬢兩家の幸福のみならず、又た社會全般の慶福と謂ふべきなり、且つ某君の岳父は多年實業界に奮闘されて、改善發達を圖りたるの紳士なり、而して某嬢の北堂は良妻賢母の譽れ高く、夙に世上の敬慕を受られたる閨秀なり、斯る得難き家庭に成長されたる兩君が、將に作られんとする新家庭の圓滿にして、家運の益々隆盛なるは素より、某君の聲名は

今より愈々世に喧傳さるゝは敢て云ふを要せず、斯の如くにして春風常に堂に充ちて、紅閨濃やかに琴瑟相和し日ならずして熊龍夢に入り、偕老の契は蓬萊の山と共に動かす、兩君の壽は高砂の松と共に長しかるべし、不肖敢て賤劣を省す、欣喜の餘り妄に蕪辭を陳ね謹んで慶祝の誠意を表す。

○同上答辭

私の欽仰畏敬せる諸君には、取分御多忙の折柄なるにも拘はらず、今日の粗宴に華を添へんと御光來下されましたる御厚情、深くお禮を申し上げます、殊に只今は交々御鄭重なる祝辭、演説を戴きまして、感佩に堪へざる次第であります、而して諸君の適當なる御稱賛のお言葉は、才徳共に足らざる私夫妻の素より當るところでは御座りませぬが只だ一意専心誠實なる其のお言葉に、僅かなりとも近づかん事を希望し、努力いたしましたいと存じます、何んとぞ今度も長へに、諸事御指導を垂れ給はらんことを切望いたします、謹んで御厚意を感謝しますると同時に、又た妻に代りて厚く御禮を申し上げます、粗酒野肴素より諸君を遇するの禮には缺けてをりますれども、どうぞ、私共の微志のあるところを諒せられて、大いに祝盃をお上げくださらんことを、お願いいたす次第であります

○銀婚式祝宴の賀辭

世に慶事少なからずと雖も、今日の如き和氣霽々たる慶祝の筵席に列し祝辭を呈するを得たるは、實に不肖の絶大なる光榮にして、又た非常なる愉快を感ずるなり。某君御夫婦に於せられては、伉儷の典を擧げられてより、格別の支障蹉跌なくして、今日の銀婚式に到達さる、二十五年と云へば所謂人生五十年の半なり、此の長月日の間には、多少の悲愁多少の困難も、人生の習ひなれば時に或ひは襲來せしこと在りしならむも、能く之を擊退し、禍を轉じて福と爲し、家庭は常に春陽百華爛熳たるの觀を呈せるは、全く御兩所の堅忍なる心と、温情に富る行ひとに因ざるべからず。夫れ世上、身顯榮の地位に進みて名聲を社會に輝かし或ひは、富貴安逸にして周圍の羨望を受くる身なるも、妻女既に世を去りて、其の榮達富貴を願つ能はざるの人あり、又た有爲の資を齎し才徳の譽を完うするの士にして天折し、妻女をして空閨孤衾を嘆せしむるものもあり、蓋し二十五年間夫妻共に健全にして、家運益々繁榮を來せる某君御夫妻の如きは、實に幸運萬福にして、而も益々壯健に其の若ける、心身、輝やける容貌、加之ならず令息令嬢も共に成年の域に達せられ、才徳兼備の譽ありて將來を飾るべき前途を有し居らるゝと云ふに至つては人誰か其の多幸多福を羨まざるものあらんや、某君一家の繁榮は自今日と共に倍々進み、兩君の健康は歳と共に彌々全く、進んで金婚の祝式を舉行されむこと、不肖の堅く信じて疑はざるところなり、此に於てか聊か蕪辭を陳

じて此の最も幸ある銀婚を祝す。

○出産の賀宴に於ける祝辭

今夕は某君の令閨が弄瓦の喜びありたるに依り、其の祝宴を茲に開かるゝに方り、某親交を辱ふせるの故を以て、此の光輝ある宴席の末班に、加ふるの光榮を得たるは、衷心より欣喜に堪へざる所なり。

某君が伉儷の典を擧られてより、僅かに二年にして、今而も家庭の基石たるべき男子を得らる、洵に多幸多望と謂ふべし、某君並びに令閨の喜悅を敢て云ふに及ばず、君が御雙親を始めとして、姻戚各位の満足知るべきなり、今より君の家庭は一段の光彩を放ちて、三春行樂の觀を呈するは、豈羨望の至りならずや、君既に基石を得らる、人生の快事何んぞ之れに如かん、自今家運益々繁榮して、多幸多福を重ねらるゝこと、思へば豈一言の賀辭なくして可ならんや、茲に祝盃を受るに先だち、聊か愚衷を陳ね、謹んで賀辭とし併せて令息の上に幸運の神の宿らせ給はんことを切に祈る。

○家督相續披露宴の祝辭

幸の半なり

人生欣ぶべく賀すべきこと、多々ありと雖も、最終の歡樂を得るまでほご慶すべき悦ぶべきことはあらざるなり、最終の觀樂とは何んぞや、即ち老て甚だ勇健に、其の家督を息に譲りて優々光風霽月を樂むを云ふなり、而して人皆な之を理想とせざるはなきも、

其の實現に至りては決して得易からざるなり。

親友某君今回家督を令息に譲り、本日佳辰を卜して其の披露の賀宴を擧らる、予亦た寵招を受けて末席に侍するの光榮に接す、欣喜何んぞ堪はん、君は幼にして大志を抱き天與の俊才を縦横に振ひて、拮据經營遂に今日の成功を致し、聲望世上に轟々たるの間に、今や光風霽月を友として、人生最終の歡樂に酔はんとさる、而して君の偉業を繼承さるゝ令息は、亦た甚だ聰明穎才にして、克己奮闘の膽堅く、江湖の信望既に最も厚し能く父の業を守成して更に一段の發展を來たし、昇天の勢を以て家運の隆昌を誇らるゝは、敢て予の贅言を俟たざるなり、嗚呼人生の慶事何んぞ之に過るものあらんや、乞ふ自愛自重以て最終の歡樂を恣まにされむことを、茲に數言を陳ね謹んで祝辭と爲す。

○還曆の壽宴に於る席上の演説

本日は某君が第六十一回の誕辰に當れるを以て、其の壽宴を茲に開かるゝに方り、私までをも御招待下さいまして、此の祝筵の末席に列なるの光榮を得ましたるは、實に抃舞の至りに堪へざると同時に、衷心より慶祝の意を表し、併せて斯る長壽にあやかりたくと存じ一言を呈したいと思ひます。

諸君、健康は人生幸福の一大要素なりと、慶應義塾の小幡學長の會て云はれましたが、實に然りて、凡そ人として此の一大要素を缺きましたならば、總ては零で、王侯貴人も



素より羨むに足らねば、又た富豪成金も希ふところでない、ところが某君は此の幸福の大要素たる健康を、六十年の長日月持續されて、而も益々元氣旺盛に、愈々精力健實と云ふに至つては羨望垂涎の至りに堪ぬのではありませんか。

諸君、輒今大隈侯は人生を悲觀して僅か五十年と詩人は云ふてゐるが、其れは大なる誤りで、決して五十年位で、浮世に失敬をするやうな、薄弱なものではない、人間の一生は確かに百二十五歳が相場だと云ふてをられますが、實際侯の御説が至當か否やは暫らく置き、彼の大きいこと此の上なしの象クン、彼は毎日特別に長い鼻を左右に振つゞけるより外に、何等の活動をも見せぬくせに、驚くなかれ其の生命は二百年だと動物學者は證明してゐる、鼻を振りつづけてゐて二百年も生命があるとすれば、相當に活動してゐる人間が百二十五歳位まで生存してゐられない筈はないと思はれます、聞くところにより依りますると、某君は其の成年時代より今日まで、所謂星を戴いて出で、肩を負て歸る底の奮闘活躍を繼續されたお方でありますから、其の今日あるの大成功は素より健康を毫も損じられなかつたと云ふのも、確かに首肯さるのであります、而して今某君の齡はと云へば、已に耳順を踰てらるゝ、其れにを拘はらず、益々壯んに事業を經營し、孜孜として倦す尙ほ自今一層後進者の牛耳を執りて、國家社會の爲めに貢獻し、盡瘁せらるゝと云ふ、老て益々盛んなる、慨あるは我々壯者の敬服…否な實に恐れ入る次第

であります振子時計的に鼻を振るより外に、活動のなき象が、二百年の齡を保つとすれば、盛年時代より大活動大奮闘を繼續されて、而して老いて元氣精力共に壯者をしのぐ旺盛なる某君のことなれば、我が朝の福祿圓滿なる最長壽者として、青史の頁を飾り、尙ほ且つ紙幣の保證人として知らざる者なき、竹内宿禰卿のごとく、二百餘歳とは云ひ能はねど、或ひは大隈侯の御説のごとく百歳以上の齡は、穴勝争はれぬことであらうと思はれます、某君よ乞ふ此の上とも益々自重して、健康と幸福とを長へに増進されむことを、聊か蕪辭を述べて祝辭といたします。

○紀元節祝宴會の賀辭

梅花笑ひて其の清姿を誇り、桃李亦た將に艶を競はんとす、此の佳期に方りて我等同志此に賀宴を開きて、本日の紀元節の吉辰を謹んで祝し奉つり、以て臣民の誠意を捧げんとす。

伏して惟みるに、聰明英武なる皇祖神武天皇、其の不世出の智略を振はれ、建國の大業を完ふされむとて、躬親から矢石を冒し、干戈の間に幾多の辛酸を忍ばれて、中原を平定し、國礎を大和の橿原に定め、萬世不變の皇基を開かれ給ふてより、茲に將に二千六百年、皇統連綿として御代を重ね給ふこと實に百二十有餘代、其の間毫も外侮を受しことなく、皇威は赫々として發揚し、國勢は駸々として増進す、而して今や晉に東亞の君

子國として誇るのみならず、世界の強國として地球上の大勢を左右し得る實力を克ち得て、其の文武に於ける言動は、等しく列強の環視羨望するところとなれり、嗚呼偉なるかな、盛なるかな。

我等至幸至福、生を此の聖世に得て、金匱缺くるところなき國家の臣民として大いに誇り、旦夕乾徳の化に浴しつゝ、文明の惠澤を恣にするは、實に無上の光榮無限の幸福なり、豊大いに祝し大いに賀せざるべけんや、然らば我等臣民は謹んで聖慮の存するところを恐察し奉り、教育勅語及び成申詔書の聖訓を奉體し、夙夜勤勉して義勇奉公を大切にし益々國運の發展國勢の増進を促進せざるべからず、是れ蓋し我等が皇室國家に對して答ふべきの微衷ならずや、茲に忝しく皇祖の遺烈を慕ひ奉り、聖壽の萬歳を三唱して、誠心誠意今日の佳節を奉祝し、爰に諸君も共に、祝杯を擧るに方り敢て淺劣を省す妾りに數言を陳ね賀辭とす。

#### ○天長節奉祝の辭

天長の佳節に際して、吾人が一意専心祈る所のは、皇室の彌々隆昌ならんことなり我が民族の中心たり、根幹なる皇室の、愈々繁榮し給ふは、我が大和民族の隨つて繁榮する所以なり、凡そ日本國民として須臾も忘るべからざるは、我が日本帝國の國體の、宇内に冠絶する一事とす、我が日本帝國に於て眞に誇りとすべきものありとせば、其は千古

萬古の白雪を頂く富嶽にあらずして、我が萬世一系の皇室なり、即ち斯の國體や今日の世界に比倫すべきものなきのみならず、世界古今を通じて復た然りとす、此の國體の一細胞と爲り、我が天皇陛下の臣民として忠節を竭すは吾人大和民族の至上の光榮にして無上の特例と云はずんばあらず、吾人は今日の佳節に際し拊舞の餘り自ら禁する能はず、敢て丹誠を抽んで、聖壽の萬歳を頌し奉る。

#### ◆五分間演説の仕方

##### ○五分間演説につきて

五分間演説……輓近の流行で……時世の寵兒だ、と云つて普通の演説と何等異なることなく、其の五分間と云ふ標語……其の出處は委しく知らざるも、電話の一通話を五分間と制限されてあるより、五分間と云ふ時間がありさへすれば、一寸と纏まりたる用談を辨じ得らるゝより出でたるものであらうか。

時世の進歩發展は、時間の空費を絶對に許さぬ、其れで一吋した席上で自家の意見を述べるに、餘り多くの時間を其れに費すやうでは、會衆に對して迷惑を與ふる恐れあり、又た他の人の演説にも、時間の妨を爲す嫌があるので、五分間が歓迎し出したに相違ない、要するに枝葉に亘る句駄らぬことを述ぶる弊を除き、要點のみを簡略に吐露させや

うと云ふのであらう。

されば所謂五分間演説の眼目は、述べんとする意見の要點のみを掴みて、わかり易く簡単に述ぶるに在るのだ、其れに就きて本章には、短簡にして意義の徹底した作例を示し、以て雄辯家諸君の参考に供せんと思ふに改造の世界に立つて、社交場裡に花を咲かさんには、蓋し五分間演説が最善の資料ならむか。

#### ○新年宴會席上演説

諸君新年と云ふ語は、三百六十五日を経過して、次の三百六十五日の第一日が來たと云ふ意で、言葉をかへて申せば、更に又た一歳を加へんとすと云ふので御座いまして、眞に平々凡々たるの感がいたしますが、併し篤考へますると新年と云ふことは、人生に取りては大いに祝賀せねばならぬことであると思ひます、と云ふのは人として誰か長壽を希はぬものは御座いませむ、長壽ならば必ず身體が強健であります、身體が強健なれば思ふまゝに活動が出來ます、活動が出來ますれば勢ひ家を興し名を高め、名聲を博して大いに世を利し國を益することを得る次第であります、斯くなりすれば吾人の希望は足りませんのであります、此の希望を足すには長壽にして身體が剛健でなくてはなりません、此の意味に於て、私は新年を迎へて健康が益々旺盛で、而して活動の精力が愈々甚大なること云ふことは、確に諸君と共に祝福すべき慶事であると存じます、否な新年

を迎へて吾人の喜び祝ふは、全く此の意味に外ならないのであります、殊に親交を重ぬる諸君と共に一堂に相會して、祝盃を舉ると云ふに至つては、實に身に餘る光榮として私は深く感謝の意を呈する次第であります、希はくば諸君と共に聖壽の萬歳を三唱し、更に各自の健康を祝福し、併せて諸君の抱ける本年の希望の上に、幸運幸福の多々益々來たらんことを祈る次第であります。

#### ○觀櫻會席上演説

諸君今や春風駘蕩百花競艶の好時節に於きまして諸君と共に花に酔つ、一日の春遊を恣にし、更に和氣霽々たる此の一堂の裡に、諸君と共に親睦の宴を開き、互ひに幸福を分つがごとき、實に身に餘る光榮して衷心より深く感謝の意を呈する次第であります、さて諸君古人の語に、年々歳々花相同じ、歳々年々人同じかるすと云ふ語があります、思ふに此れは人生の無常を歌ふたことでありませうが、併し今日の會合は全く此れと正反對ではありませんか、花は昨年の花と何等異なることなく、而して會合せる諸君も亦た前年と同數にて、而も諸君の元氣は愈々旺盛であります、其の前年と異なる點を特に示摘いたしますれば、各自の發展が著るしく進歩してゐることであり、花相同じ人相同じ、而して其の相同じき人が悉く大發展をしてゐると云ふに至つては、此れほど芽出度ことは殆んど絶無と云つても可いのである故に私は諸君との此の會合に限り、年々

歳々花相同じ、歳々年々人亦た相同じく、而して花と異なるは向上發展の進歩なりと云ひたいのです。ぞ來年の此の種の會合も本年と同様に、其の進歩發展だけは、本年より幾層倍の變化を齎すやうにいたしたいと希望します、さればにや諸君互ひに自重自愛して、活動又た活動、而して我が黨の大成を斯し祝福を謳歌しやうではありませんか、開宴に際しまして、歡喜の餘り駄辨を述べた次第であります。

○天長節賀宴席上の演説

天高くして秋氣清く、皇室の御紋章たる菊花は、黄白紅に各妍を競ひ艶を争ふ、諸君これをこそ眞に天皇日和とは申すので御座りませう。

さて諸君、今日は何んと云ふ麗かな結構な天長節でありませう、此のこよなき佳節に際し、一同が頗る健康で、多幸多福で而も豊かなる御代の泰平を謳歌しつゝ、斯のごとく瑞氣に充てる一堂に會して、共に祝盃を擧るを得ることは、抑も何んたる幸福なことでありませう、之を思へば吾々は實に感謝に堪へざる次第であります。

さて諸君我々が生れながらにして、斯も結構なる泰平の恩澤に浴し、何等の効蹟もなきに、幸福より幸福を辿りつゝ安らかに日を送つて居りますのは、諸君誰のお庇で御座りませうか、今更事新らしく申すまでもなく允文允武なる、我が、至尊陛下が我等を愛撫し教養し下される、御鴻恩の賜物ではありませんか、然らば吾人は今日の此の祝宴に列

して、皇恩の深大なるを喜びつゝ、太白を傾けて、徒らに、陛下の萬歳を三唱するのが、決して能ではあるまいかと思はれます、因て苟くも義氣に富る日本魂あり奉公心の充實せる神國男子たる以上は、皇恩の萬一に報ひ奉つると云ふことに汲々ならざるを得ぬのであります、故に吾人は各其の職務に向つて忠實に奮闘して向上發展を期することが、何によりか皇恩に答へ奉つるの道であらうかと存じられます、茲に天長の佳節を祝し奉つるに際し、妄に潜越なる語句を漏しましたる段は多謝いたします、諸君何とぞ不肖の微意のあるころを諒せられ、祝盃を傾け謹んで、聖壽の無窮を祈り奉り、更に諸君と共に夙夜勸勉して、奉公の誠を捧げ、國連の發展に努力せんことを誓ふて止まぬのであります。

○忘年會席上の演説

諸君、只今發起人某君の御挨拶にも在りましたる通り、一會社に平生各自の爲すべき事に、鞅掌奮勉せる同人が、何等の恙もなく一堂に相會して、一夕の觀を恣にいたしまするは、お互ひに慶賀欣喜の至りであります、さて諸君、此の會合を忘年の宴と云ひますが、年を忘れては大變ですのに、年を忘れんが爲めに酒宴を張るとあつては、尙ほ更以大變です、ところが年の將に逝んとする際に、此の種の會合を催うしますは思ふに人生に一種の興奮劑を興ふる爲であらうと存じられるのです、即ち一年の間には、種々の

感想生じたものでありませうし、又た様々の妄惱に遇れたこともありませう、此等の酒を酌みつゝ一夕の歡話快語の裡に忘れ、而して以て神氣を鼓舞して來む新年の雄圖をなすに在るのであります、因て此の會合は、一年中の感想妄惱を忘れて神氣を鼓舞さす、人生の興奮劑にあらずして其れ何んぞや、然らば忘年會ほど人生に到益を與ふる會合は餘り多くないのであります、願くば諸君、此の意味に於て大いに飲み大いに談じ大いに歌ひ大いに踊りて、神氣を鼓舞し新たなる奮闘の糧に供せられんことを希望いたす次第であります。

#### ○古稀賀宴席上の演説

諸君、今夕は某君の古稀の賀宴で御座りまして、私までをも御招待に預かり、此の盛筵に待べるの光榮を得ましたるは、感謝に堪へぬ次第で御座ります、さて諸君、人生の最も得がたきものは長壽であります、シテ長壽の人ほど、幸福なる事の其れから其れへと生じて來るとこはないのであります、そは申すに及ばず、健康が繼續しなければ、長壽は得られぬ、健康なるが故に活動を繼續することが出来る、其の不斷の活動は體て家を興し名を擧げると云ふ結果を持ち來たすのであります、人生は大器晩成でありますから長壽ならざれば眞個の幸福と云ふものは得られないのであります、某君は實に此の得がたき長壽を得られて、所謂眞個の幸福を握られ、聲徳共に高大であります、而して今

や古稀なりと古人の既に云ひ置きたる七十の齡に達せられたるにも拘はらず、鏗鏘として壯者を後に瞻若たらしむる旺盛なる元氣は、洵に羨むべきであります、希はくば某君よ益々健康を保たれて、八十は愚か九十も百歳も長壽あつて、私共へも其の御裾分を頂きたいと存じます、私は諸君と共に斯る芽出度き日の、今後幾久しく回り來たらんことを祈りつゝ、某君の萬歳を三唱して、乾盃をいたしたいと存じます。

#### ○運動會場の演説

諸君、今日は××商會員の秋季大運動會の御催しがあると云ふので、會主より御案内がありましたから、私は宙を飛んで參觀に罷り出た次第であります、來たりてみれば設備の整頓、運動方法の雄壯奇抜なるに先づ一驚を喫しました、ごころへ會主より何にか演説をせいと注文されて二驚を喫し、更に演説時間は五分を限度とすと云はれて三驚を喫しました、なれど參觀に罷り出た以上、この御注文に應ずる義務がありますから、據處なく一寸駄辯を漏します諸君人生の抱ける目的希望は千差萬別でありますが其の目的希望を達する根本要素は何にか、健康で御座いませう學藝にあれ商業にあれ工業にあれ諸君のごとき青年時代には、所謂泰山前に崩るゝも動かすと云ふ、旺盛なる元氣がなくはなりません、この元氣は立志修養等の讀書に依つて得られぬことはありませんが併ながら身體が不健全でありました時には折角起れる旺盛なる元氣も忽ち衰へてしまふ

ものです、故に事に處する場合も、休息の場合も、絶ず元氣が盛んでなくては、一朝難事に逢着した時に驚き怖れて迷ふものです、其れから、志想は常に健全でなくてはならぬ健全なるが故に目的希望を遺憾なく達し得ることが出来る、千古の金言に、健全なる志想は健康なる身體に宿ると云つてある、されば徹頭徹尾健康が成功の要素である、而して健康を増進する方法は、運動より他にない、慰安を兼ねて此の種の催しあるは、私がい衷心より欣喜に堪へぬ次第であります、尙ほ申し上げたいこと、諸君に對する希望も多々あります、がもう限度の五分に達しましたから、此れで失禮いたします、諸君請ふ健康を重し活潑に運動して、體力を鍛練し、健全なる志想を養成されむことを。

○支店開業披露宴の挨拶

諸君、今夕は殊に御多忙の折柄なるにも拘はらず、斯も打ち揃はれて御光來下さりましたるは、私の身に餘る光榮として深く御禮申し上げます、諸君も御承知であらるゝごとく此の附近は六七年前までは、大袈裟なことを申すやうで御座いますが、草莽々たる荒野で、狐狸の巢窟でありました、ところが兩三年前に新開地と爲りましてより、人家が建ち初め、昨年電車の延長が御座いましたより、僅か一年足らざるに斯のごとき立派な新市街と成りましたなれど、成り立で御座いますので、日用品を販賣する相當の店舗に缺けて居ります、乃で剛愎な爺と思召るゝでせうが、老後の思ひ出に本店を伴に譲りぞ打ち寛がれて緩々とお物語りあらんことを希望いたします。

○同上來賓の演説

只今御主人の御挨拶にありました通り、此の邊が斯く迅速に開けて、新市街とならうとは夢にも思はなかつたのであります、今日の此の状態から見ますと、一、二年の中には驚くべき大發展をいたすに相違御座いますまい、さて諸君、殆んど天才かと思はるゝほど、商業と云ふことにつきて機を視ることの敏き某君は、本店の方を令息に譲られて御自身で此に支店を開かれた、其の機敏なるやり方と、大英斷とには毎時ながら敬服いたします、某君は日用品の販賣につきては實に久しい御經驗があり、且つ商業道德の骨子たる正直便利と云ふことを主眼とされて、需用に應せらるゝのでありますから、他日此の新市街で第一の成功者として唄はるゝのは、必らず某君であります、私どもは一面に於て艶麗なる花を咲さるゝを羨み、一面に於て此の地發展の援助者たるを謝するのであります、今日此の御披露の盛宴に列し、欣喜の餘り一言を述べて御禮を申し上げます。

○新任校長歡迎會の演説

諸君……諸君も御承知の通り、某氏は本縣教育會の幹事として、我が教育會に噴々の名ある方でありませぬ、従がつて氏の令名を知らざる人は、縣下に殆どない云つても可い位ゐであります、其の某氏が本校の校長として赴任されましたは、實に我が町の幸福のみならず至大なる名譽であります、由來當町の教育は縣下に模範を垂れ常に模範學校として名聲を博してゐたのであります、デ我々町民は日夜名校長の赴任あらんことを切望して止まなかつたのであります、ところが幸なるかな氏の如き、人格識見共に善美を盡せる名校長を得ましたのは、實に天啓と云はねばなりません、殊に此の校長を佐けて學事に精勵し、校務を處理せらるゝ本校の職員諸氏は、既に秀才良師の方々のみなれば、所謂鬼に金棒であつて、本校の名實共に多々とし發揚せらるゝは、私の堅く信じて疑はざるところであります、私は諸君と共に新任校長の益々自重せられて、本校の爲めに十分の努力を盡されんことを切望いたします、此の光輝ある歡迎の席末に列したるを喜び、一言以て歡迎の辭といたします。

#### ○郡會議員當選披露宴席の演説

今回の郡會議員選舉は大分に競争が激烈のやうでありました、従つて當局の御世話は一と通りで御座いませぬやうでした、この群雄逐鹿の裡に立たれし我が畏敬する某君は

最高點にて當選された、これ云ふまでもなく、其の卓越せる學識才能に加ふるに、高潔なる人格と、主義牢乎なるも、衆望の繫がれる結果であるので御座ります、今や國家多事、好個の議政者を要求する秋に當りて、某君のごとき士の選ばれて、郡政に參與するは、實に我が郡の幸福のみならず、國家社會の幸福と云はねばなりません、我が郷黨は君を得たるを喜び君の其の譽職に在りて、郡政を縦横に料理されむことを冀ふのであります、而して役員選舉に方り、議長の椅子を占むるものは其れ君か、君よ何んぞ奮闘努力して郡政に貢献し以て本郡の光輝を愈々發揚されむことを、本日茲に當選披露の祝宴を張るゝに際し、不肖亦た招ねかれて席末に伍するの光榮を謝し、一言以て祝意を述ぶる次第であります。

#### ○警察署長歡迎會席上演説

今回某君が當警察署長として來任せられましたのは、本町の爲め將た管轄各村の爲め、慶賀に堪へないところであります、某氏は巡查部長より警部補に昇進されて、爾來久しく本部に在勤されてゐまして、敏腕の聞へ高き方でありましたが、今回警部に昇進されて當警察署長に赴任されたのであります、諸君、氏は如何に高潔なる人格を具有せらるゝか、又た更に如何に社會の尊敬を購へるかを知るに足りませう、當地方は由來比較的犯罪人を出すことが少ないので、先づ以て優良に近ひ方と云つても可いのです、なれ

ご一利あれば一害ありと云ふことは、數の免かれざるところで、御承知通り小工業場が甚だ澤山に在ります、其れが爲めに職工の出入が頻繁です、デ、從がつて喧嘩と賭博の忌はしい弊風があります、是れが當地方の缺點であります、然るに今回某氏のごとき敏腕家の名署長を得まして、地方民は漸く安堵の思をいたしました、今後氏の手腕に依り、蠻俗弊風を根絶して地方氣風の振肅を完ふすることは、私の堅く信じて疑はざるところであります、新任署長某氏よ、地方民が氏に期待するところ既に斯のごとくであります、希はくば今後氏が多年經驗せらるゝ敏腕を、當地方の行政治安に遺憾なく振はれんことを仰望いたして止まぬのであります。

#### ○成業歸省者歡迎會の演説

諸君、今夕は我等が竹馬の友たりし某君が、學成り職を得て、所謂錦を衣て故郷へ歸へられましたに依り、同志相謀りて聊か歡迎の意を表すべく、粗宴を張りたる次第で御座います、さて諸君、某君は諸君も御存じの通り、少年にして郷を離れ東京に出て苦學されたのです、苦學と云ふことは口に於てこそ云ひ易ふ御座いますけれど、さて實際に行つてみますと、中々骨の折れることで、非常に克己心の旺んにして、忍耐力に富んで居る人でなければ、苦學に依つて成功を望むことは絶對に不可能であります、ところが某君は苦學に依つて早稻田大學を卒業され、學成ると共に職を得て、今や歸省されたの

であります、某君の御満足は素より云ふまでもなく、御双親の御喜悅は如何ばかりか想像されるのであります、苦學に依つて早稻田大學を卒業されたと云ふのが、既に君の人物の非凡なるを證明してゐますに、更に卒業さるゝと同時に、有爲の地位に就職されたと云ふのは、學識の亦た非凡なることを裏書した道理であります、我等は君のごとき非凡なる人物を、本村より出したるを光榮として、欣喜に堪へぬのであります、君よ御承知の通り、斯る僻陬のごとでありますから、相變らず肴は甚だ御粗末でありますけれど、酒は十分の御用意がありますに依り、何卒一夕の歡を盡されんことを希望いたします。

#### ○開業披露祝宴會の演説

友人某君は曩に獨立營業のお考へがありました、今回萬般の御準備が整頓いたしました、愈々茲に商店開業の機運が到達いたし、本日トして斯る盛大なる披露の祝宴を擧るゝに際し、不肖亦た寵招を蒙りました、此の宴席に列するの光榮を得ましたは、實に欣喜に堪へざる次第であります。

諸君、商業と一口に申しますけれど、私の考では商業ほど難かしい事はあるまいと思はれます、と云ふのは業の成敗は運にあらずして人に在るからであります、即ち學識と經驗と才智と徳望、この四條件が完備いたしませぬと、完全なる成功は得望されずと云つ



ても可いの下あります、今某君は夙に優等を以て商業學校を卒業され、爾來某大商店に勤務する、こと五星霜、其の間實地の經驗甚だ深く、加ふるに君の才氣は天禀でありまして、終始體外に喚發してゐますのみならず、上下に親しむこと厚く、従つて徳望も亦た甚大であります、斯も大切なる四條件が完備いたしてをりますから、將來の大成功は手に唾して待つべきであります、加之ならず御店舖の所在地たるや、本市の中樞とも云ふべき、四通八達の要地でありまして、交通の至便なるは申すまでもなく、自今益々盛の度を高むる、有望の土地であります、嗚呼君のごとき人にして、斯も有利の地を占らるゝに於ては、成功を望まずとしても豈成功せでは止むべきであります、涙の麴麩をせざれば汝の靈力を識ること能はずとは泰西の詩人ゲーラーの教へた金言であります、なれども君には此の金言は不必要であらうと思はれます、とは云ふものゝ成功の彼岸に達するまでには、多少の波瀾を通り抜ける覺悟がなくてはなりませんから、君よ請ふ益々奮闘努力されむことを、今や祝盃を頂きまするに先ちまして、一言を述べ今日の光榮を深謝し、併せて君の前途を祝福いたします

## 式辞及演說編 (終)

## 現代文藝編

### 文章を作る目的

天地の大に較べて人間は誠に小さいものであります。人間の中の個人は尙更小さいものであります。蒼海の一粟、九牛の一毛など云はるゝ此の小さい個人の小さい思想を如何やうに現はさうかなぞと、云つて下らぬ苦心をするよりも、古來の偉人の書き残して呉れた物を見て楽しんでゐた方がよいではないか、日月は天に懸り、山河は地に列ぶ大天地の大文章を見て心を養ふ方がよいではないか。かやうに考へて文章の稽古などを一向下らなく思ふ人もありません。私も時にさやうに思ふ一人であります。けれども又見方をかへれば、文章を作るのは隠れたる自己を發見する所以である、亂れたる自己を整ふる所以である、新しき自己を創造する所以である、未知の自己を殖

す所以である。文章を作るのは譬へば井戸を掘るやうなものであります。直径三尺深さ三間唯だその裡に満つる丈のものを得やうとして掘つて見ると、汲めども盡きぬ泉が滾々と湧いて来る。その如くは是れ丈のことを書かうと思つて書き進んでゆくと思ひも設けぬ感想文句が、あちらからも、こちらからも湧き出で、出来上つた結果はこんな思想が自分の頭の中にあつたのかと驚かれるやうな事も間々あります。有るか無きかのボンヤリした感想は著るしき形を取つて鮮かに紙面に現はれます。ごつちやに混雑してゐた考はキリツと整へられて文字の上に現はれます。さきには、自分が所有してゐることも思はなかつた思想が立派な自分の財産となつて文章の上に現れます。たまには、自分が所有してゐるとも思はなかつた思想が立派な自分の財産となつて文章の中に形を現はして來ます。かう見れば文章を書くのは、亂れたる自己を整へ、曖昧なる自己を明らかにし、貧しき自己を富まし新らしき自己を加へ、而して新たに一個の自己を産みおとす所以であります。

書かぬならばそれもよい。立派に書かないのは、是れ亦立派に生活するのであります。之れと同時に書くならば、それもよい。立派に書くのはこれ亦立派に生活するのであります。唯だどうせ書くならば、立派に一生懸命に書きたいのであります。即ち自己を整へ、自己を磨き自己を明らかにし、自己を富まし加へるやうなものを書きたいものです。さういふものを書くには、この道にも亦一種の修業が必要です。内容の方面に於いてもまた形式の方面に於いてもそれ相當の修業が必要です。

### 自分を現はすといふこと

文章を書くに當つて第一に心得べきことは、「自分を現はす」といふことであります。文章は本来自分の見たこと、聞いたこと、考へた事、感じたことを書くべきもので、自分に關係のないことを捜し求めて書くべきものではありません。私どもは生活の上では、自分を有りのまゝに相應はしく現はさうとするが、文章の上では、とかく

見も聞きも感じもせぬ餘所事を言はうとする癖のあるものであります。言葉の上では氣取つたり、大人ぶつたり、人真似をしたりすることを忌み嫌ふが、文字の上では自分の心とは似もつかぬ真似事を言ひ表はして喜ぶ癖のあるものであります。活きた立派な文章を書かうとする者は、まづこの癖を除き去つて、自分を正直に明白に現はす工夫をせねばなりません。文章はつまり言葉を文字に現はした丈のものであります。それ故私ともは活きた相手に聞かずもりて、相手に恥ぢぬやうに自分を文字に現はさねばなりません。自分を最もよく現はした文章が最もよい文章であります。昔から大家の名文傑作と呼ばれたものは、皆その人の性格手振の最もよく現はれたものであります。

無論現在の自分をそのまゝ現はすのみが、文章の能ではありません。不明瞭の事があれば、よく考へて調べた上で明らかに言ひ表はさねばなりません。生なるは熟させ、粗なるは磨き上げ、足らざるは補充し、混雜したるは整理して書き表はさねばなりません。

せん。要するに自分の心にある考を、よく育て上げ、磨き整へて、立派な自分にして言ひ表はすこと、それが文章修業の第一歩であり、同時に理想であります。

### 文章の工夫

支那の文章の大家歐陽修といふ人が、その甥から文章稽古の工夫をたづねられた時に「何も不思議な秘法は無い、唯だ多く読み、多く作る、多く考へる、此の三つの心掛があるばかりだ。」と答へたといふ事で、これが「看多、做多、商量多」の三多之法と稱せられてゐます。いかにも文をよく作るには、澤山文章を読まねばなりません。短い袖は振られぬ。無い金は使はれぬ。書くべき事柄を持つて居なければ、巧みな筆も現しようの無いわけでありませぬ。又澤山知つてゐる材料の中から、極よしの丈を擇りすぐつて使へば、暢びりした、ゆとりのある、奥深い文章が出来るが、少ない材料をせい一杯に使ふのではとてもろくな文章の出来る筈がありません。故に文章を

よく作るには、

第一にどうしても多く讀まねばなりません。即ち立派な名文を多く讀むやうにせねばなりません。

第二に、多く讀むと共に多く作ることを努めねばなりません。

第三には、多く作ると共に、よき所以、悪しき所以、優れる所以、劣れる所以をよく考へて比較研究せねばなりません。

第四に、もう一つ加へたいのは、多く觀察することであり、是れまでの文章家は多く書物、即ち古人の文章に頼つたものであります。しかし、私どもはそればかりではいかぬ。私どもは書物を見、古人の文章を見てその良悪優劣を考へると共に、常に此の目の前の自然人事を細かに觀察して、之れを忠實に書きあらはす工夫をせねばなりません。是れが自分の文章を活かす第一の道であり、同時に自ら活きる有效なる道であります。

## 文章練習法

文章練習法の第一方法としては御手本を選ぶこととあります。御手本は何でも極上等のものを選びに限り、最高所を望んで及ばぬまでも飛びつかうとつとめるに限り、棒ほど願へば針ほど叶ふともいひます。山ほど願へば塵ほど叶ふとも申します。

兩替屋が新米の小僧に金銀貨の鑑定を教へるには、まづ本物の上等貨幣のみを見せるさうであります。本物を見馴れた目には贋物の下等品はすぐ看破られるといふことです。趣味が高くなれば下等品は見られなくなります。良い文章のみを見てゐると悪い文章は見られなくなります。従つて自分の書く文章の品位も上つて來ます。ある支那の文章家は「文章を學ぶならば自分の先生の先生を學べ、さすれば先生と並んで仲間になり兄弟になれる。」といふことを云ひました。文章がよく書けるやうになる第一

の法は多く讀むこと、選りぬきの名文を多く讀むことであるといふことは前に述べた通りであります。

文章學の大家の文學博士五十嵐力先生のお話の中に次のやうな面白くて爲になることがあります。

ある夏のこと、五十嵐博士は九州を旅行なされて、歸りに京都へ寄つて五六日を送りました。或日のこと紀念に漆器を買ふことを想つて、京都一といふ菓子屋へ行れて良い塗物を賣る店は何處だらうと尋ねますと、その主人が古代風などの御上品なものを召さうと思召すならば××といふ店へ御いでなさい、萬人向きのいろいろな物品を御覽なさらうとならば〇〇といふ店へ御いでなさいと教へて呉れました。教へに従つて××店の方へ行きますと、店は狭いけれども陳列してある品はいづれも二三十圓以上百圓千圓といふ價格のもので、博物館の漆器部などで見るやうな類ひのものばかりであります。その中には東京の岩崎家から註文になつたといふ、尊い底光のする硯箱

などもありました。番頭の話によると、御即位式の垂物を塗る御用も此の店で仰せつかつてあるといふことであります。博士はこれを見て大へんびつくりして、まさか逃げても歸れず、宜しく目の養生をさして貰つて、それから〇〇店へまゐりました。この店には五錢十錢程度より何十圓程度に至るいろいろの品が廣く並べてありました。が、××店の陳列所を見た目には二目と見られるものがありませぬ。そこで、博士は大いに感じました。何事も目は高く養はずばならぬものだと言ふに感じたのであります。

古人は「己れに如かざるものを友とすること勿れ」と教へました。文章道も同じ事でありませぬ。それですから、私は諸君に向かつて、まづ何より名文の擇り讀みをされることをおすゝめいたします。

眞實を有りのまゝに寫すこと

眞の道徳は懺悔から始まるとも申します。眞心の白狀、欺かざる、經驗から出發せぬ話に實のあらう筈がありません。で、私も自分自身の不束なる經驗の白狀から出立して、諸君の參考にして頂かうと思ひます。

第一に私は、文章を書くときは必ず眞實を寫さう、有るがまゝを寫さうと思ひます。かういふと如何にも平凡な當然過ぎて改めて云ふ必要のない事のやうに思はれませんが決してさうではありません。一寸考へると見識振つたり、外觀を飾つたり、あるひは何か爲めにする事のある場合の他、故意に虚偽を寫さう、事實を曲げて書かうとするやうな人は世の中に無かりさうに思はれますが、必ずしもさうでないといふのは、人間には、通じて昔を尊び強者に屈從するといふ性質があつて、古人の言つた事は、先進國の大家の書振りだといふと、それが事實に合つてゐると否とにかゝはらず、又自分が本當にさう思つてゐるのか否かをも論せずして、ついその先輩の眞意を誤り、やゝもすれば虚偽と思はずして、知らずく虚偽といふやうな事になります。

國家社會の問題などには根つから注意をしたことのない人でも、筆を執れば忠君愛國とか國家のためとか、社會のためとか書き立てます。あるひは「今や道義地を拂つて空し」などいふ考へたこともない文句を並べる人があるかと、思ふと、その同じ人が「今は聖徳天子上にあり、廷に曠士なく、州に飢民なし」といふやうな手放しの頌徳文を書くこともあります。

私も以前はまづかういふ風でありました、今でも斯ういふ心持が腹の底から一寸一寸と頭を出します、今の年とつた人はもちろん、若い人にもかういふ書き方をする人又かういふ書き方をよいと心得てゐる人が澤山あるやうですが、これは大へん間違つた考へであります。

### 眞情眞心を寫すこと

第二に、私は眞情を寫さう、装はぬ眞心を寫さうと思ひます。これは廣く申せば第一

の「眞實を有りのまゝに寫す」といふ中に含まれることではありますが、狭く考へれば第一は客觀の事物をそのまゝに寫す意味で、第二に客觀の事實を正しく認めると誤り認めるとにかゝはらず、心に感じたまゝを寫すといふ意味であります。洗濯物を幽霊と見、木の切株を虎狼と見るのは事實には違つてゐるが臆病者に取つては、實際の偽りなき感じであります、逃した魚は惜しむ目には大きく見え、失つた戀人は憶るゝ心には美しく思はれます。激した場合には長者先輩に對して失禮なことを申すことがありませう。心臆した場合には辻褄の合はぬ話をすることもありませう。而してかやうな場合には其言葉が、たとひ間違つてゐても矛盾してゐても、卑しくても、見すばらしくても、品が悪くても、心底の感情を偽らず書いたといふところに、必ず一種の誠實の光があらはれて來て人を打つものであります。西洋の哲人は感情が昂まるほど詞の調子が低くなるといひました。「一死何かあらん」御自愛遊ばされたく「いとほしき人よ」といふが如き、好意を表したり、侍べつたりする上品な辭令文句は、多くは誠

實の伴はぬものが多いか、ほんとの熱誠は「あゝ有難い」やつつける「こん畜生」ああ可愛い」といふやうな調子の低い俗な詞に現はれるであります。而してかやうな詞は調子が低いながらに深く人を感ぜさせる力を備へて來るものであります。私が第二に我が感情をそのまゝに現はすこと、即ち主觀的自然を立派に成立たすことを心掛けるのはこのためであります。

### 言葉の選み方

第三は言葉の選み方であります。事實そのまゝ、感情そのまゝを、現はすに適當な一語、ピッタリ箱まつた、据つた、落ちついた語、この場合此の語でなければならぬ、他に掛替が無いといふ語を見出ださうと骨折るのは無論のことでありませんが、その適當な語句を擇むにあつて私は出來るだけ、外國系の語よりは國語即ち日本語を、そして古語より、現代語、即ち現在私どもが平常に使つてゐる語を用ゐやうと苦心致す

のであります。もつとも、擬古文或は擬外國文を作るときは例外もありますが、今の世に生活する自分の生きた感じを書き現はすならば私は遠慮なく現代語を使用致します。例へば「往々」といふよりも「たび〜」或は「やゝもすれば」といひます。「款乃」と書かずして「船唄」と書きます。「兄弟牆に騒ぐ」と書かずして「内輪喧嘩」あるひは「萩の雨なり」といひます。「流汗淋漓」といはずして「汗だら〜」といひます。「咄何者ぞ」あはれ、やうもなき痴者かな」などはいはずして「チエー、このろくでなし奴が」といひます。

西洋の語も同じ事で日本といふ國土、現今といふ時代の洗禮を受けない詞をば、めつたに用ひまいと思ひます。もちろん、時と場合とで、かうばかりも行きませんが、私は特別の必要のない限りは、どこまでも日本式にそして現代式に言ひ現はしたいものだと念じてゐます。

### 感興の必要なこと

達意一通りの事務的文章ならば、冷やかな頭で用のあることをポツリ〜と書き並べるだけでもよいでせうが、趣味感情を主とする文章、殊に調子の高い情を寫す長篇の文章になつて來ると、その文章が活きて調子づいて來るには、氣乗りのすること、即ち感興といふことが必要になつて來ます。

無論感興に乗つた文章だからと申しても一から十までそれが名文だとは限りませんがけれども概して熱誠なる作家が趣味本位の長い文章を書く際には、時々は感興に見舞はることがあり、そして感興に見舞はれた部分が、作中の目貫の光り處になるといふのが普通であります。

感興は求めずして自然に起こることもあります。又、自然に起るのが最も健全なものであります。時には人工をかけて感興を起すといふことも大分あるやうであり



ます。

イギリス人で、日本に歸化した有名を文學者でラフカヂオ、ハーンといふ方はこの感興の極端な方で作にかかつて興が乗つて來ると、まるで夢見るやうになつてしまつたといふことであります。ある時、子供がそれに氣がついて大いに心配して「お父さんどうぞ夢からさめて下さい。」と云つたといふ位です。このハーンといふ人は日本の姓名を名乗つて小泉八雲と申しました。この方は十數年前に歿なされましたが、大へん日本が好きで日本に關する著書が幾冊もあります。諸君が若し勉學の餘暇があつたら一度はこの人の作品を讀んで見ることをおすすめます。英文で書いたものや、日本文に譯されたものが出版されてあります。實に名文で書かれてありますから十分に參考になることと信じます。

さて、已に物を書く以上は成るべく雜念を排し、注意を集め油がのつて隙間のない心持で書けるやうにしたいものであります。これについて私の考を述べますと、

第一には書かうとする題目に對する取調べを十分にし、精しくし、深くして充實した心持になることとあります。

第二には閑靜な堂に入つて、書かうとする事に注意を集めることとあります。

第三には、自分が書かうと思ふ文章と同種類の他の文章を讀んで、その方面の聯想を豊富にし濃密にし、その方面の氣分を興奮させ、我が心の奥に潜んで居る思想を誘ひ出させることとあります。

文章概論講座を受持ちまして私は先づ第一に考へましたのは、如何にして文章の概略を平易に分り易く講義しやうかといふことであります。とかく文章概論と申しますと、理窟に走りたがるもので、讀んで甚だ興味のないものになり易いものであります。たとへば、文章を初めて學ばうとする方々に對して、文章の組織がどうの、修辭學がどうの、文章の種類がどうの、文章の變遷がどうのといふことを細かく詳細に述べたところで、初めからそれが十分に呑み込めるものではありません。呑み込めない

から面白味おもしろみがなくなつてしまひます。それですから、私は拙わたくしつたない講義かうぎ振りではあります  
が、以上の通りとおに、ごく分り易やすく實際じつさいに諸君しよくんが文章ぶんしょうを書く上うへに於て、直ぐ役やくに立つや  
うに、理論りろんを一切さいい云はずに、實際問題じつさいもんだいについて申上げた次第しだいであります。

甚はなはだ大づかみな講述かうじゆつであります。私の受持うけもちは「文章概論ぶんしょうがいろん」といふ名前なまへが示す通り文  
章全體しやうぜんたいに關する知識ちしきを申上げたのであります。どうぞ之れを土臺どだいとしまして手引てびきとし  
まして他の諸先生方しよせんせいの各種類かくしゆるいの文章ぶんしょうに關する有益いうえきな御講座ごかうざにお進み下くださることをお願  
ひ申まをします。この講義かうぎはつまり、相撲すまうで申せば露拂つゆはらひといふ格かくであります。文學ぶんがくに進み  
入るべき第一だいいちの門もんなのであります。どうかそのお考かんがへで十分御研究ごけんきゆう下くださることをお願  
ひいたします。では、それで御名残りごなごりと致いたしませう。

## 叙事抒情文作法講座

### 言葉から文字へ

人間の「心」が眼や顔や起居振舞ききよふるまひに現はれるのを普通に表情へうじやうと言つてをりますが、  
その一層進んだものは「言葉」であります。一層進んだといふのよりは最上さいじやうの物が、  
「言葉」だといふ方が適切てきせつであります。私は、今、その「表情」といふことよりも  
「言葉」について申上げたいと思ひます。  
言葉を構成かうせいしてゐる聲こゑには極めて複雑ふくざつな調子てうしがありまして、それらが「言葉」を決  
して概念的、抽象ちゆうしやう的にはしてしまはないのであります。即ち、顔や肢あしや手の動作どうさくが持  
ち表はす現象げんしやうを繪畫えいざ的てきだとすれば、言葉が持つ表情へうじやうは音樂おんがく的てきだと言ふことが出來ま  
す。

昔から「言はぬは言ふにいや勝る」と言つてをりますが、それは決して「言葉」以上の表情が沈黙のうちにあるといふことではなくて、言ひ現はすべきその言葉が見當らないで困つてゐる。憐れな、しほらしい場合を形容したのに過ぎません。「雄辯は銀沈黙は金」といふ西洋の諺も、喋り過ぎれば損をするから黙つてゐるに限るといふ消極な教訓であります。喋つて直ぐに腹の中を見透かされるといふやうではならぬといふことを云つたのであります。しかし賢こげに思ひ深げに、見えるのも形式だけ表面だけであるならば、むしろ醜くさをさらけ出して、自らも反せいし他からも注意された方が、どんなによい生活であるか解りません。

ですが、私どもは、冥想し思索すべき場合には、それこそ沈黙を重ねて、深くく自己の内部に沈潜しなければならぬのは勿論なことでありまして。ですから、言葉が最も思想を表現するものであることがお分りになるでせう。

さうです。「言葉」は何と云つても最上の表情なのであります。それだけ「言葉」と

いふものを私たちは重んじなければなりません。私どもの「心」が尊いといふことを御存じの方であるならば、その「心」を表白する最上の形式であるところの「言葉」を重んじなければならぬのであります。けれども平常米の飯を食へ馴れてゐるものが飯の味を無視すると同じく、又健康なものがその生命の有りがたさを感じないやうに馴れるといふことは恐ろしいものであります。幼年時代から使ひ馴れた「言葉」の値打を、人は知らずに過してゐます。それは物の値打を殺してしまひます。

よくよく考へて御覽なさい「魂」とか「心」とかいはれる人間の精神の複雑微妙な姿は直ちに「言葉」に含まれてゐるのであります。音楽、美術、文學等に思想發表の諸形式を考へる前に私どもはまづ「言葉」を考へずにはゐられないではありませんか。その「言葉」から遂に「文字」を發見したのであります。ですから「文字」を取扱ふは「心」を取扱ふと同じでなければならぬ。「文字」は「言葉」の代りではあります、同時に「心」の代りでもあるのです。故に「文字」は即ち「心」であり「想」

であるといふ程の信念がなければなりません。事實またそれに相違ないのであります。

私は本講義の最初に於て先づ國語問題について十分申上げたい考へであつたのです。が、さうするとあまり高級な否廣汎になる傾向があるので、そしてまた一朝一夕の間題でもありませんので、「言葉」と「文字」とについて一應述べて置くことにしました。諸君はそのつもりで、徐々として此方面の進歩發達にも心懸けつつ文章の研究をして貰ひたいのであります。

此のことは繰り返して他の場合にも實例を擧げて具體的に述べる機會もありませうから、諸君は先づ文章を書かうとする前に、何よりも「生きた心」から直接に生れ出した「言葉」や「文字」を使ふやうにしなければなりません。これが出来さへすれば、文章作法などは知らなくても立派に文章は書けるのであります。

## 叙事文の種類

心から言葉が生れ、言葉が文字に變つた段取は前に述べたやうなわけでありませうが、その「文字」が集まつて「文章」が出来るといふことは今更述べる必要もなく明らかかなことです。昔、ひと頃は「言葉」と「文章」が別々のものであつた時がありましたが、明治文壇の恩人とも言ふべき故尾崎紅葉や故二葉亭四迷等の努力がもとで、「言文一致」といふものが盛んに行はれるやうになつてからは、所謂「文章體」といふやうなものは或種の書籍又は論說位のもので、今日一般では殆んど「言葉」と「文字」との區別はなくなつたのであります。ですから、今日以後文章を書かうとする人は、その文章をことさらに「文章體」にする必要はすこしもありません。ふだん、私どもが使つてゐると同じ言葉を直ちに文字に變へ、その文字を綴り合はせれば、そこに立派な文字が生れて來るに相違ありません。けれども、文章を研究しようとするには、

昔の所謂「文章體」の文章も研究しなければいけません。しかしその「文章體」もその文章が生れた時代にはその時代の「言文一致」であつたといふことを忘れてはなりません。

さて、文章の内容的發達を考へて見ますると、主情意的生活の盛んであつた原始時代にまづ詩歌が現はれ、次第に經驗を重ねて主智的傾向に入つて來ると抒情詩が叙事文となり、やがて散文といふ物が現はれて來たのであります。

この散文が今日一口に「文章」といふ物であります。その散文には「抒情」と「叙事」との二大要素が含まれて、をつてそれ／＼を含有する分野の多少に依つて、或物は「叙事文」と言はれ或物は「抒情文」と呼ばはれて、根本的の區別を認めることのできないものは、申す迄でもないことでもあります。それで、今日一般に「叙事文」と呼ばれてゐる物は凡そ次の種類であります。

A 寫生文

- B 報告文
- C 日記文
- D 紀行文
- E 小説

右のうち「寫生文」だけは、故正岡子規以來「ホト、ギス」一派の人々に長い間の努力によつて特殊な發達をして來たのであるから、純然たる「叙事文」といふことのできる物が多いのですが、それにしても客觀的事象の羅列に過ぎないと見てしまふのは、餘りに作者の心事を無視したものであります。いつ、いかなる種類の文章でも讀者は作者の「心」に接するのではあります。その作者の「心」が、主觀的であるか或は客觀的であるか、主情的であるか或は主智的であるかを推察して區別して見るより外はないのであります。次の「報告文」にしましても、しか／＼の事象が起つたとかあつたとかを單に報告する場合の物が「叙事文」のうちに數へらるべきもので

あつて、或心情を吐露したもものや、訴へた報告であるならば「抒情文」に組入れらる如き事なのです。「日記文」にしても「紀行文」にしても筆者の態度如何に依つては、むしろ「抒情文」に入らなければならないときもありません。「小説」に至つて複雑極まりなき人生の記録を描出するものでありますから、叙事と抒情とが交錯して一寸「叙事文」などとは云はれぬこともありませんが、形式上描寫を主としたものでありますから「叙事文」の最も偉大な物と見ることが出来ませう。

### 抒情文一般

叙事文とは何であるかといふことは前に述べた通りで今更説明するまでもありますまい。それでは叙事文の種類はと申せば、それで叙事文の種類とはほとんど同じであると答へて差支へありません。同じ種類の文章も書く人の態度の客観的と主観的との如何によりて區別されるのであります。

それを文章の發達史から研究すれば、叙事詩が叙事文になり抒情詩が抒情文になつたのでありますから、抒情文の最も原始的な姿を知らうとするには主として感情を述べた詩歌に行くのが一番分り易いことであります。

生命のまたけむ人はたたみ菰へぐりの山の熊樞の葉を警華に挿せその子

これは日本武尊が病んでまさに死なうとする折に詠んだ歌であります。一寸考へると客観的のやうであります。二三次繰返して讀むならば、そこにはまさに消え行かうとする生命が、他のすこやかなの生命の幸を望んだ悲壯な感情が溢るゝばかりに籠められてあることが解ります。

いく山河越えさり行かば淋しさの果てなむ國ぞ今日も旅行く

右は現代の歌人若山牧水氏の作で、それには「淋しさ」といふ感情を表はす言葉が使はれてゐますから、抒情歌だといふことがすぐ合點されるでせう。

酒は唇より來り、

戀は眼より入る。

われ等老い且つ死ぬる前に、

知るべき一切の眞理はこれのみ。

われ杯を唇に當て、

女を眺め、且つ嘆息す。

これはアイルランド現代の詩人イエーツ氏の作を西條八十氏が譯したのであります。これも抒情詩であることは斷るまでもありません。

其他、小説についても抒情と叙事との説明を詳しく述べたいのでありますが、紙面の都合もありますから。

甚だ不完全ながら、これで叙事抒情文法講座を終ることゝします。多少でも諸君の文章を作る上に参考になれば私の本懐であります。終りに臨んで次の言葉を諸君にお贈り申しませう、

「本を培へよ、然らば末の花も美しからむ」

# 短歌作法講座

## 一、短歌とはどんなものか

短歌とはどんなものかと云ふことを申し上げれば、それは随分興味のある問題であります。

短歌といふ詩形は日本でなければ生れる事の出来ない詩形であります、日本人と短歌との關係、すなはち日本人の生活と三十一音律といふ詩形との間には深い根ざしがあるのであります。古今二千年を通じて此短歌がいかに我が國民性に大きな力を及ぼしてゐるかといふことは、萬葉集や勅選集といふ本の一頁を開いて見ても直ぐに了解されることでありませう。

では、最初短歌はどういふやうにして生れたかと申すに、それは作者の本能的欲求からして、自然に生まれたものであります。

## 二、新らしい短歌

短歌の歴史を今こゝで申上げるのは、講義が複雑になるばかりでなく、初學者にはかへつて、短歌は難かしいものだと感じさせるやうなことであらうから、さうした古昔の短歌については何れ機會を見て述べることにします。

茲に新しい短歌といふのは、古い傳習に囚はれた舊派の短歌に對しての謂ひであります。舊派の短歌。即ち月並の和歌は近年に到りてその藝術的價値を失つてしまつて今更、新らしき短歌と斷る必要もありませんが、混同せられるのを厭うて茲に斷る次第であります。でありますから、以下これより説かうとするのは専ら新らしき短歌のことであると承知してもらひたい。



### 三、短歌は三十一音律

短歌はその最初生れたときから今日に到るまで三十一音律、即ち三十一文字であります。その三十一音律を分けて見ますと、五句になります。たとへば  
 ひんかしの、野にかげろひの、たつみえて、かへりみすれば、つきかたぶきぬ  
 でもまた新らしき短歌の

四人等おのが棲家の監獄の

屋根つくろへり五日の夕日

でも、皆五句三十一音律であります。

しからは、三十一音律で五句から成つてゐるものでしたら、何んでも短歌であるかといふことが出来るかと申せば、それは甚しく謬つた考へであります。三十一音律に盛らるべき内容は作者の眞實の聲であり眞實の叫びでなければなりません作者の生命を

吹込んだものでなければなりません。

### 四、短歌を作るには

諸君は先づ歌を作らうとする前に、出来るだけ諸君の生活を肥えせしめなければなりません。それには古い歌集では、萬葉集、現代では左の諸家の歌集を精讀研究する必要があります。こゝには諸君に是非ともお奨めしたいと思ふ現代諸家の代表的歌集をお知らせすることにしませう。

- |        |        |
|--------|--------|
| 日記の端より | 尾上 柴舟著 |
| 桐の花    | 北原 白秋著 |
| 赤光     | 齋藤 茂吉著 |
| 啄木歌集   | 石川 啄木著 |
| 林泉集    | 中村 憲吉著 |

生くる日に

前田 夕暮著

くろ土

若山 牧水著

十年

島木 赤彦著

伊藤左千夫全集

伊藤左千夫著

草の夢

與謝野品子著

空穂歌集

窪田 空穂著

其他古泉千燈、吉植庄亮、半田良平、土屋文明、尾上篤二郎諸氏の歌集は良書であります。以上は私の思ひ出したまへですから、其他にも澤山に農書がありますから、十分研究して、頂きたいものであります。猶、短歌といふものがお判りになつて來たら萬葉集を熟讀して欲しいものであります。

### 五、歌を作る機會

諸先輩の歌を研究し、だん／＼諸君の生活が肥えて來て、短歌に對する知識の眼が開いて來たらば、その時に初めて諸君は歌を作るがよい。

野に出で、自然の推移に驚き、海に日の昇るのを見て詩情を湧かせ、麥刈る農夫唄を唄ふ少女の姿、街をゆきて我が感傷の眼をひらくとき、諸君はどうにかして歌にあらはし、三十一音律に自分の感じ、わが心に映じたところのものを歌ひいでたいといふ、湧き溢るゝ切なる欲求をおぼえるであります。かういふ氣分の湧いたときに歌は生れるのであります。諸君はその機を逸せず大膽に正直に率直に歌はれる事をおすゝめします。

巖から水が湧き出づるやうに、心から流露し出づるものがなくては歌にはなりません。心から感情が流露するときその時こそ諸君の歌のなるときであります。

## 六、自己に目覺めよ

三六

さて、前述のやうにして歌が出来たら、こんどは、新しく自己の行くべき道を選ぶだけの勇氣が無ければなりません。そして何時も新しい勇氣を湧かして進むべきであります。そうして進んでゆく中に、自己の行くべき道が自然にわかつて来るであります。しかしそれまでには、種々な障害が出て随分困難をせねばならないといふことを覺悟して下さい。例へば半年か一年かする中に、ばつたりと歌が出来なくなつてしまふやうなことがあります。かういふ時には、その人のもつとも危険な時代であつてどうかすると、失望したり自暴を起したりして、歌から離れて行くやうなことがあります。勝ちになります。どんな人でもこゝまでは来るものでありますが、この危険時代を突破することが何よりの肝要であります。此の苦しい時代から切り抜けて進む人でなければ到底立派な歌人にはなれないのであります。

## 七、囚はるゝ勿れ

歌を作る時に決して言葉に囚はれてはいけない。茲でかういふことを申上げると、諸君をあまり子供扱ひにするやうに思はれるかも知れませんが、私はこのことを誰方にも知つて頂きたいので申上げる次第であります。

言葉に囚へられるといふことは、文字に囚へられるのと同じことでもあります。歌は如何なる場合にもその人の心から發した、叫びでありますから、決してこれを人工的に作爲してはなりません。しかるに、萬葉集がよいからと云つて萬葉集時代の言葉、即ち古語を何の考へもなく使用するといふのは歌の精神を知らぬものがやるべきで、眞の歌人たるものは決してこんな眞似をしてはいけません。

現代には現代の言葉があります、又語法もあります。私どもは古い言葉は成可使はぬやうにして現代語で歌ふことを心掛けるのが肝要です。それが正しい道なのであり

三入  
ます。もしどうしても古語を使はなければならぬときは十分研究をしてから使ふやうにして頂きたいのであります。

### 八、秀歌を作ると思ふな

香川景樹が、「歌は心の歎息なり」と言つて居ります。いづれにしても歌は心の聲なのであります。心の叫びなのであります。難かしく云ふならば、作者の主観の燃焼であります。それですから、諸君は作歌の際に、先づ秀れた歌を詠んで讀者を驚かさうなどといふやうな豫定的な野心を抱いてはいけません。秀歌を作らうと思へば思ふほどその歌は悪い歌になつてしまひます。秀歌を作らうなどいふのは匠氣といふものであり又術氣といふものであります。

諸君はどこまでも本然を尊ばねばなりません。

### 九、眞實一路

短歌を作る第一の根柢は、自己に眞實であれといふことであります。

例へば幸福な境涯にゐるものが、それでは面白い歌が作れないといふので、ことさらに漂泊の旅などを假想していかにも悲しさうな歌を作つてゐるものがあつたとしたら、それこそ大變な間違ひです。幸福なものは幸福を歌ふべきであります。不幸なもの不幸を歌ふべしであります。何も餘細工や新粉細工のやうに指先きで作ら上げてくても、立派な歌はいくらでも出来るものであります。

昔は随分これに似たやうな滑稽なことも多かつたのです。彼の能因法師の有名な、「都をば霞とともにいでしかど秋風ぞ吹く白川の關」などはそれでありました。能因法師はその當時京都の庵室にゐて、「秋風ぞ吹く白川の關」などと好い加減に空想して歌つてゐたのであります。何んとあきれたことではありませんか。嘘は必ず剥げるもの

でありますから、諸君は常に眞實一路を自分のゆくべき途として進んで下さい。

四〇

## 一〇、短歌と用語

短歌は前に言つた通り短かい詩でありますから、その表現には最も心を用ひなければなりません。それですから、その用語は一字一語でも粗雑な考へで用ひてはなりません。青年には青年の言葉があり、女性には女性の言葉があり、地方には地方の言葉があるものであります。それと同じく現代には現代の短歌の言葉があるのであります。これは申すまでもなく現代語でなければなりません。

それであるから、その言葉は地方語でも都會語でもよいのであるからして、現代の短歌は現代の用語を用ひて作り、そしてその用語は最も洗練された言葉を選び、すべて現代に接觸して生きてゐる言葉を使ふべきであります。それからもう一つは内容に適應した言葉を選択せよといひたいのであります。しかし現代語といふのは俗語とい

ふのではありませんから誤解してはいけません。

要するに短歌の用語は出来るだけ現代の言葉を用ゐるのがよいのであります。短歌には短歌特殊なリズムがあり、作者としてはその作者のもつリズムがありますから、そのリズムを殺してまでも強いて現代語を用ゐねばならぬといふのではないのであります。猶ほ一應申上げて置きたいのは、口語も現代語ではありますが、茲にいふ現代語とは文章語と口語との兩者を指すので、最も洗練された言葉の意味であります。

## 一一、現歌壇諸家の歌

以上で短歌といふものゝ大體を申上げたから、それより以下現歌壇の代表的歌人を撰んで各自其特色ある歌風を紹介したいと思ひます。十分に研究して参考にして下さい。

齋藤茂吉氏の歌

めん鶏ら砂せびりたれひつそりと剃刀研人は過ぎゆきにけり  
光もて囚人の瞳てらしたりこの囚人を観ざるべからず

齋藤茂吉氏は雑誌「アララギ」の同人で、新しき萬葉調をはじめた人であります。  
随分特色のある歌風であります。

尾上柴舟氏の歌

青山の宮のきざはし絨氈の青きをふめば悲しかしこし  
奥ぶかう入りますままに御衣の白涙みちたる眼にのこりたり

尾上柴舟氏の歌には銀の鈴のやうなのがあります。又、乾燥無味な理智ばかりの歌

もありません。以上の歌は高雅な歌風をよくあらはして居ります。

土岐哀果氏の歌

一介の書生なりけり——

はつ夏の

日光のなかに感謝す、われは

×

あけがたの、

よほの鳥の聲に

ほほじろが啼けりおれも泣くかな

土岐哀果氏の歌は、すべてを傳習的に観まいとする態度にあります。歌を三行に書

くことは死んだ石川啄木氏や土岐氏がはじめたのであります。

四四

### 若山牧水氏の歌

あるかなき思ひにすがりさびしめる深夜のわれと青夏蟲と  
かなしくも痛みこめたるものおもひ守りて一日もの喰べず居り

若山牧水氏の歌は、その歌集を順次に読んでゆくと随分變化をしてゐるやうであります。目下雑誌「創作」を發行して静岡縣沼津に住んで居ります。

### 金子薫園氏の歌

停車場をいでて並木の夜を行くわが肩をうつものあり落葉か  
柳の芽ちらと光りて加茂川のはとりの春は青みそめけり

金子薫園氏の歌は自然を歌つたものによいのがあつたやうであります。日本畫趣味で  
ともすると因襲的であります。温情的で親しみがあつた。

### 吉井勇氏の歌

まぼろしにふとこそうかべはしけやしおれんに似たる君の横顔  
戀知らず情知らずのただありのありのすさびの君を忘れず

吉井勇氏は現代に於けるロマンチックな歌人の一人であります。氏は昔より今にい  
たるまで同じやうな態度でいつもロマンチックな境致を歌つてゐます。

### 島木赤彦氏の歌

夕寒き芒がなかに入りて行くおのが姿の黝くもあるか

四五

眞白なる布團の上に只ひとつ椿の花のこぼれて久しき

四六

島木赤彦氏は「アララギ」の同人であります。静物畫のやうで、それが油畫ではなく、濫い木版畫のやうであります。色彩的繪畫的ではありませんが、ケバ／＼したところのない、極めて静かでおつとりした古風の味ひがあります。

北原白秋氏の歌

はつとして耳を澄ませばその音は木の葉ささやくこゑなりしかな  
澄みわたる光のなかにそことなくかがやけるものの音のきこゆる

北原白秋氏の歌は自由な作風で、明るいおほらかなうらうらとした調子に官能のひびきがきこえるやうな歌が多いと思はれます。

與謝野晶子氏の歌

水色とみどりと紅の三つの色ほのかにのこる心なりけり  
四月來ぬ紺のはんてん着るつばめ憎きことなど云ひそなつばめ

與謝野晶子氏はこれまで随分澤山な歌集を出してゐます。以上の二首は「さくら草」といふ中にあるものであります。

石川啄木氏の歌

どうなりと勝手になれといふごとき  
わがこのごろを  
ひとり怒るる。

四七



x

よごれたる手を見る——

ちやうど

この頃の自分の心に對ふが如し。

石川啄木氏は二十八歳で死んでしまつた薄幸な歌人であります。氏の歌は現代人間生活の歌つて、その獨創を示して居ります。その末に到達するにつれて苦悶と懊惱の連鎖そのまゝのやうな歌が澤山あります。

以上で本講は完結致します。(終)

## 俳句作法講座

俳句とはどんなものか、それを知りたいといふ心と、自分で俳句を作りたいといふ心は別なものです。ですが、俳句を理解し味ふといふことも俳句を作るといふことも結極は作ると云ふ事と共に讀むことに勉めなければいけません。自分で句を作ると同時に人の句を讀むことを怠つてはならないのです。

それですから、俳句の作法といふものは、實は、自分で作り、自分で工夫して、自分で進んでゆくと云ふ外にはないのであります。

さて、それでは俳句とはどんなものか、こゝに例を擧げて、それに解釋を施し、抽象的な解説よりも、實物で具體的に吞込んでいたただかうと思ひます。

○

押合うて紅梅咲きの枝かざり

賀瑞

紅梅が枝のあらむ限り、一面にコテ〜と押合つて咲いてゐる。紅梅が細い枝にイヤになる程澤山咲いてゐるといふ所を寫生した句である。實際にあまりシツコク咲いてゐる紅梅の景色を、其の寫し方の上手なために、實際に紅梅の咲いてゐるのを見るよりも、この句の方が面白いものになつてゐる。

夕立に走り下るや竹の蟻

丈草

夕立がザア〜と降つて来た。それに驚いて蟻が非常なあわてかたをして竹を下りて来る。そこを寫したのである。この夕立は夕立の降りはじめの景色で、夕立の豪爽に降り始めた時、蟻があわてて竹を痛快に早く走り下る、といふので金體の句が活き活きしたものになつて居る。

今貸した提灯の火や草の露

几董

客が歸るといふので、この邊は田舎道で危いからと言つて提灯を貸して上げた。枝折戸に立つて客を見送つて見ると、今貸した提灯が、草葉の露を照らし〜、だんだん小さくなつて行く、あはれな風情である、面白い詩景である。

星月夜一つも星の飛ばぬ哉

子規

夜は沈々と更けてゐる。静かに空を見てゐると、いつ迄見てゐても星は更に飛ばぬしかもこぼれるやうな星月夜であるのに、星が一つも飛ばぬのは淋しいものである。といふ感じを句にしたものである。其角の「陸釣の後姿や秋の風」といふあの不動の淋しさが、やはりこの句は現はしてゐるのである。

宿貸せと刀投出す吹雪かな

蕪村

これは吹雪の中を旅して来た武士が、やつと家を見つけて、やれ嬉しやと飛込んだ其利那の光景を、上手に、巧みに、見えるやうに活寫した句である。

「宿貸せ」と云ふ語が、短かくて、その息を切らした太い聲を聞くやうである。さうして「刀投出す」と云ふので、家の者の返事など聞く違もなく、直ぐ上り込まう休まうと、焦つた様が見えるやうである。

以上で春夏秋冬の句を擧げて評釋を試みたつもりであります。これで俳句と云ふものは、こんなものと云ふ事がおほよそおはかりになつたでせう。

○

俳句は十七字の詩と云はれてゐますが、しかし必ず十七字に限るものでなく、まづ十七字見當といふだけで、それより短くても長くてもよいのであります。その例を二三擧げて見ませう。

鶯のこちら向いたれば丸い顔

存 亞

これは一字餘つてゐます。

西院の鐘東寺の鼓雪解くる

宇 橋

これは二字餘つてゐます。

枕頭や美人消ゆると見れば芥子の花

黄 雨

これは三字餘つてゐます。

銚處々に夕風そよぐ囉かな

太 祇

これは四字餘つてゐます。

茶僧月を見るに梅干の影の如くに來り

杉 風

これは大變に餘つてゐます。

この字餘りは先づ二十四五字といふ所でせう。それより長くなつては俳句といふものの調子が崩れてしまひます。

又、字の少ない句もありますが、それは十五字止りでせう。三字足らぬともう俳句

の調子が崩れて來ます。

ふるいけや、かはづとびこむ、みづのおと

これは十七字で、五七五の調子になつてゐます。俳句は五七五といふ調子になるのが普通なのです。しかし、又、十七字ではあるが、五七五調子でない句もあります。

冷飯にうたてや胡葱膾

紅葉

燕や三十三間堂の雨

酒竹

影取らむとすれば春の水黄なり

曉臺

これは十七字で五七五になつてゐない例であります。

○  
俳句には文法は要らぬといふ人もありますが、それは暴論といふものです。さればと云つて、文法にはかり捉はれるのも考へものです。

すり切れたはたきの先や日短き

これは文法でいふならば「日短き」は「日ぞ短き」とせねばならぬのですが、そうすれば、上に係りが無いから「日短し」とせねばならぬといふことになりましたが、これはどうしても「日短き」でなければいけません。

春雨や物語り行く蓑に傘

この「蓑に傘」を、どうしても「蓑と傘」とせねば文法上から云つて間違ひであるといふのは、つまらぬ議論であります。

俳句の如き短かい詩は、文法のために要りもせぬ字を足して調子を崩すべきではありません。それですから、俳句を作るときに、句法を輕んじてはいけません。文法に使はれないやうに、文法はこつちから使つてやるべきものであるといふことを知つて置いて下さい。

○  
俳句では一句の中どこにも切れる所が無くてだら／＼と一續きになつてゐるといふ

ことは成るべく避けなければなりません。

すり切れた箒の先に蟲の聲

これでは何んとなくシツカリした印象がありません。

すり切れた箒の先や蟲の聲

かうすれば、蟲の鳴いてゐる箒の先が強く明らかに感じられます。それは「先に」

として續けるのを「先や」としてこゝで切つたからであります。この「や」といふの

は俳句では切字といふのです。切字には「や」「かな」「けり」「なり」「れり」「あり」等澤

山ありますが、ここには「や」「かな」「けり」の使ひ方を示しませう。

古池や蛙 込む水の音

市中は物の匂ひや夏の月

これは「や」の使ひ方の例であります。

仕合せな岨の松かな今日の月

嵐雪

芭蕉 凡兆

梅が香にのつと日の出る山路かな

これはかなの使ひ方の例であります。

夜半の梅清女が局たたきけり

それは「けり」の使ひ方の例であります。

この切字の外に、「に」「も」「を」「の」の字の働き、即ちテニヲハの用法を心得て置く

必要があらう。次にその例句を挙げて見ませう。

梅が香にのつと日の出る山路かな

さみだれに馬の欠伸のうつりけり

梅が香に驚く梅の散る日かな

梅が香に連れ立つ日さへまだ寒し

これは「に」の用法であります。

さみだれや鮓のおもしろも暗蟪

芭蕉

几董

芭蕉

五明

千代良

鬼貫

鬼貫

脛高くからげし人も風薫る

行秋をふらりと蚊帳の釣手かな

待戀に棄つる明を子規

それは「を」の用法であります。

雪の人歸るとばかり見ゆる哉

碁の人のしてやつたりと團扇哉

これは「の」の用法であります。

乙 史 也  
二 邦 有

綺 石  
向 陽

俳句は短かい詩でありますから、殊に印象的で暗示的でなくてははいけません。たとへば「美人」といへば、端花な女と思ひますが、愛嬌があるとは思ひません。「美女」と云へば艶めいた方の女と思へるでせう。「別嬪」といへば美しいけれど重味があります。それですから言語を選ぶといふことは必要なことです。

○

俳句には季がなくてはならぬと云はれてゐます。この季といふのは季節に關したものが詠み込んで無くてはならぬと云ふことであります。即ち季候と没交渉な句は句ではないといふのであります。(私はこの季が無いのも句ではないとは思つてゐません)そのことは第二のこととして、まづこの季が必要であるは何んとしても忘れてはいけません。この季のことを俳句では季題と云ふのです。この季題のおもなるものを覚え、季題の言ひ方、季題の意味を覚えて置かねばなりません。

背の低き馬に乗る日の霞かな

艦を押すや片手に鯊を釣りながら

蕪 村  
墨 水

これには霞と鯊とが季になつてゐます。霞は春で鯊は秋のものです。次におもな季題について例句を示しませう。

春の部

初雷を腹が鳴るかと思ひけり

山寺や撞損なひの鐘霞む

絲遊や煙のかわく屋根の上

朝風の波立つて風光る頃

二月二日目白死にけり別れ霜

童謡嬉々として山笑ひけり

二月らしくなつて暮ゆく二月かな

行春を近江の人の惜みける

一天に雲無しひらり〜蝶

椿落ち鶏啼き椿又落つる

以上は春の部だけですが、其の夏にも秋にも冬にもそれ〜季節がついて居りますが、あまり長くなりなますから例句は止めることにしました。

向陽 燕村 立志 碧梧桐 一露 三餘 瓊音 芭蕉 花蝶 梅室

○  
俳句には寫生と云ふことが必要であります。必要であるといふばかりでなく、俳句は寫生から出發せねばなりません。紅葉はこんな色のもの、その枝ぶりはこんなもの、こんな所に生えてゐるものと、机の上で考へる紅葉は概念であつて、誰れでもこの位のこととは知つてゐることです。それで概念俳句、つまり机の上で作つて句はロクなものがないことになりました。

山紅葉照るや仁王の口の中

入相の嵐に怒る紅葉かな

このやうな句は、机の上でいくらでも作れます。

物かげへまはれば寒き紅葉かな

岩ばなにさし出て薄き紅葉かな

柿紅葉遠く竹割る響かな

五明 一茶 侍業

このやうな句は、机の上で作れるものではありません。實地にのぞまぬと出来ぬ句であります。それですから諸君は手帳やノートを持つて、到る所の見るもの聞くもの感ずるものを句にするやうにしなければいけません。

○

何の道でもさうであります。俳句も、人真似をするばかりが能ではない。真似をするその手本になる人がいかに豪い人でも、その真似をしたものにはロクなものがない。芭蕉のやうな世界的の立派な詩人の真似でもそれはいけぬ。芭蕉は芭蕉、自分は自分である。自分の感ずる所は他人の感じたものとは違ふ。この唯一の貴むべき自分が、自分の句を作るといふ所に、意味があるのであります。

古人も今人も他人の作は自分の句を作る爲の参考品であります。このことを忘れてはなりません。私がかゝりに説くこの俳句作法の如きでも、もとよりさうであります。氣に入らぬ、反對したいと思ふ所は、従はなくてもよいのであります。しかし、参考

品も少しも見ないで、はじめから我流を押通すといふのは感心出来ぬやりかたであります。先人がいろ／＼なことをして置いた。それを参考にして後人がその事をやつてこそ、其事が進み押展げられてゆくのであります。こゝのところをよく誤解のないやうに了解して欲しいのであります。

○

少し俳句を読み慣れ作り慣れると、寫さむとする物に就て味ふといふよりも、そしてそれを感じるといふ事よりも前に、フイと句が出来てしまふことがある。つまり、それは腹の底から出ないで口さきで出てしまふものであります。それは「器用な句であつて、決して「まこと」の句ではないのであります。

句は「まこと」から出たので無くてはいけません。心底の物を投出すと云ふ態度で句を作らなければなりません。

新らしがる奴は舊くなる奴であります。俳句十七字の微といへども、それに我を盛



り、それによつて現在未來の人に對し想の感通をなさむとする以上は、新とか舊とか  
そんな一時的のものを作つてゐては駄目であります。我が吐くもの一句と雖も必ず永  
久に存すべきものと云ふ覺悟を以て、腹のドン底から作るべきであります。(完結)

# 現代文藝編 (終)

## 處世修養編

### ▲時間

時間じかんは一分ぶん時じなりとも徒いたづらに過すす事ことなかれ、若もし徒いたづらに過するときは、終身しゅうしん贖いひ返かへし得え  
べからざるに至いたる、夫それ故ゆゑに一分ぶん間かんと雖いも徒いたづらに過すすは宜よろしからず、朝あさ何時なんじより起おき、  
何時なんじ迄までは何なにをなし、十二じふに時に食しょく事をなし、又また何時なんじより何時なんじ迄までを休やすみと定め、朝あさ夕ゆふの食しょく事じ  
も時ときを定さだめてなし、寢ねるときも時ときを定さだめてなし、眠ねむる時間じかんも大たい概がい時ときを定さだめて爲なすべし、  
仕事しごとを爲なし過するも害がいとなり、眠ねむり過するも害がいとなり、休やすみ過するも害がいとなるものなれば、各おの  
各おのの身み分ぶんと職しやく業げふと健けん康かうの程ほど度どによりて、適てき當たうせる様やうに定さだむべし。

身體の健康なる人は眠る時間を少く定め、弱きものは労働をなして成るべく永く眠るべし。

幼年のときは身體の發育どきなれば成るべく永く眠るべし。

朝は五時に起き六時に朝飯を食し、十二時に晝飯をなし十時には寢眠に就くべし。事業を起すも時の宜しきに起し、事業を熄めるも時の宜しきを以てすべし。

老年者は休みの時を多くし、壯年者は勉強時間を多くすべし。

時間は黄金の如しと云ふ金言を常に考ふべし。

初期を修養の時とし、中期を勉強労働のときとなし、後世期を安樂のときと定むべし。

### ▲労働

凡そ吾人の根機や精分と云ものは限りあるものゆへ、非常の勞力は決して爲すまじき事なり、然るに若し程度も加減もなく、非常の勞力を爲せば、軀中の勢力は其一方に傾きて、是れがために却て軀に病氣などを惹起すに至るべし、深く慎むべし、之を要するに毎日の勞力は必らず其軀に相應すべき丈の事より外は決して爲べからず、又日々其人の

勞力に堪へ得べき丈……又手にて爲すことの出来る丈の仕事をして見計らひ定め置くべし、左なくしては、平素の根機や精分に相應せぬ非常の勞力をして、軀に病氣などを惹起し、夫れが爲めに永く仕事を休み、療治の爲めに醫士や藥價に貴重の金錢を費すは寔に愚の至りなり。

勞力せざれば災を招き勞力に過ぐれば又災害を身に受く。

壯年のものは労働を爲すべく、老年のものは力仕事を爲すべからず。

前半世の安樂は、後半世の苦みを來し、前半世の辛苦は後半生の安樂に至るべし。

金錢は勞力によりて求むることを得るも、病氣は勞力によりて防ぐ事を得ず。

労働も過度に過るときは身體を弱くし、反身の過害となる。

適度な勞力に快樂を増し、且つ身體を愈々強壯ならしむ。

## ●家庭の經濟

### ▲經濟の心得

一家の貧乏となるも、富貴となるも、皆一家の生活かたの經濟によりて定まるものなれば、經濟のことを學ぶは尤も至要のことなるべし、殊更一家にありては、婦女子の此學を心得る事大切なりとす、富は濡手で粟を握る様なる理由には參らず、毎日の費用の使用かたによりて宜しき様に一豪の括りを整ふるときは、次第に有福となり、塵り積りて山を成す如く、榮に榮へ益々加はりて、大富の身となるものなり、若し一家の括り方下手なるときは、先祖代々積み重ねたる金錢も、次第に消費盡して、貧乏の淵に至るものなり、一家富むときは一國の富となり、一國富むときは天下の富となる、之に反して、一家貧乏になるときは一國貧乏となり、一國貧乏になるときは天下の貧乏となる、此の故に、一家の富を増すは、其幸只一家のみに止まらずして、天下の幸となる、一家貧乏となるときは、其家の不幸のみに止まらずして實に天下の不幸となるものなり、家事經濟の要旨は、入金を多くして出金を少くするにあり、大利益を得んとするよりは、大損失を招かざる様謹むべし、利子を採らんよりも、利子を人に出す事勿れ。

是ことを知りて己れの本分を盡すは、富に至るの至道なり。

金錢は入りの分を先に考へて費用の分を定むべし、

積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あるは古來の通例なり。

不義によれる富は返て困難を招くの導きなり。

▲買物の心得

買ひ物を爲すには、可成信用ある商人より買取るべし。毎日消費し易き處の贅澤品、及び酒の類、菓子類は、成るべく其時の必要の需めに際して買へし、多く買ひ置きをするときは、餘分の消費をなすものなり、又時節の移りかわりによりて不用となる品或は永く家に蓄ふるときは味ひの變ずるものは少々宛買ひ求むべし。

夏の食物は殊更注意して、腐敗したるものを買ふべからず。

買物は必ず現金を以て成すべし。

惣菜を買ふには能く家内の人數によりて定め、是等のもの、買調方に注意すべし。

▲金錢の出納

凡そ金銭の出納は、縦ひ僅かのものなりとも注意して亂りに費さるる様にすべし、塵も積れば山となる理由にて、僅の金銭も度々費すときは、一ヶ月となりては随分多額のものとなるものなり、是等の費用を節儉するには、豫め小遣帳を製し置き、毎日の小遣金を記して、月末に至り之を能く算用して見るときは、其次の月よりは次第に減ずる様になるものなり、出入り商人より買物の品を貸るときは、之を小遣帳の買物の部に明記して後日の間違ひを來さる用意とすべし、商人より月末に至り、書出しを持ち來るときは、自分の覺書の處と能く照し合して支拂ひを爲すべし、然ざれば、時々間違ひを生ずる事ありて、兩方に不都合なる事あればなり、又金銭の出入帳には、毎日の支拂ひを記して、後日の參考に備へ、又請取證は能く保存しく暫くの間置くべし、書畫骨董の代價高き品を深く愛すべからず。時々新贖の品を買ふべからず。僅少の金銭に不注意なるときは、富者となることを得ず。十銭の入金あらば八銭を費し、一圓の入金あらば八十銭を費すべし。

金銭の支拂を好くし、信用を積むことに氣をつくべし。

價高き玩弄物を購入すべからず。

善良なる結果なき處へは金銭を出すべからず。

遊藝等に沈酔りて徒らに金銭を費さざる様にすべし。

#### ▲貯金の必要

人老年となるときは、勞働も事業もなすことを得ず、此の故に、誰にても平時壯年のときにありて、毎日収入の幾分を割きて之を貯へ、他日病氣等の入用の備へに置き、他人の厄介にならざる様心懸けざるべからず若きときは是等の心配は無用なるが如しと雖も、時には金銭に差支ふる事なしとも計られず、故に若きときより老後の圖をなさいるべからず、若し病等の起るありて、赤貧の身となりて日々の食物をも需め兼ね、妻子餓に泣くときになりては、死するより外はなきに至らん、斯かる人と雖も、若き時より費用を節儉し、少し宛なりとも金を貯ふるときは、此の如き災に陥る事なかるべし。貯金は銀行又は郵便局に預くべし。

毎週三十錢宛を四十年間預くるときは、毎週二圓五十錢の拂ひ戻しを得べし。  
貯金を爲したる人は常に喜びあり、喜びありたる人は遂に病の起ること少く漸々に健康にも至るべし。

貯金をなすは金錢に仕事をなさしむるに等し。

貯金の心懸あるものは子息朋友に別るゝとも困難することなし。

### ●家庭の意義

#### ▲一家と國家と異なる點

家は小なる國家に似たるものなれば、之を治めんとせば政治も、法律も、帝王も必要なり、國家は他人種の集まりたるものなれども、家庭は親子夫妻の集まりたるものなれば一國の政事とは少しく異ならざるべからず、只其形の能く似たるのみにして、實際の上よりは事情の相違せる處を見る、一國は法律を以て政治の綱となせども、一家は人情を以て其結びめとせざるべからず、一家を治むるに裁判所の法庭の如く、毎事にかど立た

る事をのみ云ふて取扱ふときは、治めんとして反て家の破れを來すの虞れあるものなり一國の事情を知るは新聞官報の如きものなりしも、一家は夫妻親子相向き合ひて、樂しき談話に於て家の脈を通ずるものなり、國家の成立は權利義務を以て其任務を盡すものなり、若し一家のうち愛心なるものを取り去るときは、味もなく快樂もなく、恰も砂礫の相集まりたるが如し、一家を治めんとするものは、此點に能く意を用ひざるべからず一家に働くものも、此處の意を深く解せざるべからず、主従此主要なる處に意の注るときは、一家の建設は快樂のうちに至るべし。

#### ▲特長の利用

一家のものを導くには、各人の性質のある處を能く知りて、其性のかたむく處に勢を利用するにあり、假令ば順風に船を向けるときは船を走らす事を得れども、逆風に向ふときは船の遅きのみならず、波の爲に船の沈没する憂あり、斯如其子若し剛強なる性なれば、之を順柔なるものとならしむる爲に叱責するよりも、其心を最も困難なる事に向はしめて利用するに之かず、若し其子其事の結果を爲さば大なる働ならん、若し其事を

爲し難きときは己れの剛強の不可なるを知るに至るべし、凡て人の心の向ふ處にかじを  
探り、各自の經驗を自ら諾せしむるを要す。

#### ▲立身し得べき教育

えてにはほを擧げよと云ふ事は、立身の要訣なる事なり、故に世の親たるものは、愛子の  
立身を希ふならば、先づ其子の性の好む處に教育を施すべし、其子商ひを好まば商業家  
たらしめよ、其子學文を好まば學者たらしめよ、其子大工を好まば大工ならしめよ、然  
らずして己れ軍人なるが故に其子も軍人たらせんとして、不健康のものに軍人教育を施  
さんとするは悪し、然し爰に注意すべき事は、子弟の無智なる望を以てむやみに立て  
たる目的を制肘する事なり。

#### ▲家庭の快樂

家庭に快樂を來すは、家内のもの一同そろひて仕事をなし、うちそろひて又休むにあ  
り、夫は夫、妻は妻、親子各々心を離し、意を通せず、言語もあまりなく、妻は夫の意  
見を用ひず、夫は妻の信切を受けずと云ふの家庭は、如何に金錢寶玉の内に座し、奴隸

を命令するとも、其苦しきは地獄のさたも曾ならず、其之に引かへ、金錢なく日々勞働  
によりて其日の活計を圖る家も、同心同力各々本分を守りて、喜びには共に喜び、かな  
しみに共になし、乏しきときは一膳の食を共に半膳宛食する決心ある家の内は、  
如何に樂しきぞや、金錢あり餘る不和合の家、遠く及ばざる處なり、又一人勞働して他  
の者の安樂をするも喜びにわらず、樂みは凡て共に仕事をなすにあり、決して飲食美服  
等にわらざるなり。

#### ▲有徳の行爲

小人閑居して不善をなす、今の世には君子とか聖人とか云ふ人は一人もなし、又支那の  
君子にては今日の人道を全ふするや否やは余之を知らず、兎に角今日安樂する人は小人  
最も多し爰を以て悪人は皆安樂社會にありと云ふも過言にわらざると信ず、勞働者には  
素より有徳の君子と云ふものなければども、毎日營む處の仕事に追はれて、夜分は直ちに  
勞疲して他事を顧みるの暇なく、朝何時より夕何時迄と、勞働の福音に生涯を費し、有  
徳の事業をなすの暇もなきかわりに、惡事をなすの暇とは少もわらざるなり、如斯

一一一  
勉強して一の職業を學び、始めて精巧なる産物は出づるなれ、此職人等は風俗の事も、儀式の事も、權利とか道理とか云ふ事も知らざれども、己れが働き勤むる處の事業のうち、自ら有徳の事をなすなり。

#### ▲親類の交際

親類は余家の一部の如きものなれば、親密にせざるべからざるは當然の事なり故に度々訪問するを宜しとす、遠方にある親類には書面を以て時々なぐさむるに至りて大切の事なり、然し爰に一の注意を要する事は、親密にするの一事にして、干渉して家の自由をさまたげる事はいひべき事なり、日本に於て、人生の大切よりも家すじを大切にす處より、間々親類に餘事なる干渉を認めて、之が爲に一家の自治を害し、反て不幸に立到る事あり、之れ親類を助けんとして反て害するものぞかし、又一家には誰にも告げ難き秘密の事あれば、親類なりとも餘り細事に立寄りて、人の自由を害するは悪し。

#### ▲結婚の用意

結婚は神聖なるものにして人生の大倫なり、故に猥に之をなし、猥に離縁するは宜しからず、之を選むに當りては、各自の好みあれば、教通りに行かざるものなれば爰に云はず、只願はしき事は、一旦婚したる妻は決して離縁せざるにあり、元樹にまざるうら樹なしの道理にて、幾重度之をなし換ゆるも、反て始より悪しくなるべし、又新婚を結びて人生の眞正の旅路に入りたるものなれば、豫め困難に入るの用意なかるべからず誰しも妻を迎ゆるときは、安樂と快樂とを目的とするものなりしも、結婚は安樂を與ふるものにあらずして愈々困難に入り、人間の本領を表はすの始めなれば、前以て其用意あるこそ要用なれ。

#### ▲家庭の談話

家の發達は談話にあり、毎日毎夜親子夫妻精神を共にし、事業をなす、皆談話の媒を経ざるものなし、談話其當を得れば事業舉り、談話其當を失すれば事業擧らず、加ふるに談話は子弟を形造する骨肉となるものなれば、子弟のある家庭に於ては餘程注意を要するなり漬物は鹽にて漬けられ美味を出す如く、家の子弟は父兄の談話に鹽漬けせらるゝ漬物の如きものなり、談話清潔なれば子弟清潔になり、談話正直なれば子弟正直になり、

談話に悪毒を流せば子弟次第に悪しきものとなるに至る、家庭の談話は、學校の教育よりも深く兒童の心を左右するものなり、又快樂も談話によりて來り、哀しみも談話によりて來り、後來の希望も談話によりて來る也、世の父兄たるもの、只口より出まかせの事を云ふ事なかれ。

▲簡易なる道徳

道は汝の口にあり汝の心にありと、是れ則ち此頃の簡易なる道徳を行ふに、學者の云ふ如くしかつめらしき六ヶ敷ものにあらず只深切にして平易に朋友親類に交るを云ひ四角四面角立ちたる小笠原流の禮式に膝を痛むるにあらず、只赤心さへあれば夫にて足れりとす。

▲養子及びよめ

姑と嫁、養子と養父母、是れ仲の悪しき事として小説にまで歌はるゝなり、何故に他人にさえ深切ある人情を持つ人にして、斯く不親密なるかは理由のあるあればなり、是れ双方の間にうたぐり心ありて、くだけたる心なければなり、人は悪人ならざれば、大

概の事は信任して大目になし、又かけ隔りたる心さえ取り除けば、豈ぞ仲の善からざる理あらんや。

▲書 信

離れたる處にありて音信を通ずるものは手紙なり、手紙程人の親みを深からしむるものはあらず、只一葉の端書なり、然し手紙を受けし人の心には十倍に價する菓子を送らるゝよりも尙うれし、書くべき手紙を書かざる人は社交の方法を知らざるの人なり、手紙の書き方は別段六ヶ敷文字を用ゆるに及はず、只其用向の明なる丈にて足れり、只要用なる事は極分明なる書方さへすれば、字の巧拙は論すべからず。

▲衣服に就て

衣服は時々の流行につれて、花美なるものを拵へ換るは大に悪しき風習なり、相當の品にて何れの時も見にくからざる健固なるものを用ゆるを善しとす。

▲飲食に就て

世の中は春の櫻に秋の月、夫婦仲よく三度食ふ飯、此歌は種々なる家庭の事を教ゆるな



り、人の樂みは食事のときを以て最も多きとなす、食事は幼時より老年に至る迄、盲目者より聾者に至る迄、皆此快樂をなさざるものなし、是を以て食事の樂みは人間一般の樂みと云ふなり、凡て食事は一人にて食するよりも多人數にて食するを最も善しと思ふなり而して可成は外に於て食する事を廢し、父子夫妻互ひに集りて食する心懸こそ、家を治むる大切なる事とす、酒は呑むべし酒に呑まるべからずと云ふは至要なる哲言なり余は酒を呑む事の悪か善かを知らず、然し多くの酒を呑みて身の健康を害するは、確に惡事惡風俗なりと云ふに躊躇せざるべし。

▲二種の人物

えらゐる人に二種あり、一は人の上に立つ人、一は人の下に立つ人なり、人の上に立つ人となるは六ヶ敷事なれども、無理を云ふ人の下にありて動く人は又至りて六ヶ敷事なり余は此人の下位にありて、己れの任務を全ふする人を一種の人物と云ふ也、孔子も馬の番人をせし事あり、此時孔夫子は其任務を全ふしたる故に畜繁殖せりと云ふ、今日は大概の事は順序つきたれば勤勉なる者は頓ては人の上に立ち、放任なるものは人の下に立つに至るなるべし、畢竟自己の勉不勉にあるなり、

▲朋友

友あり遠方より來る又樂しからずやとは、孔夫子の云はれし事なり、凡て人間と云ふものは朋友の必要あるべく金錢と米衣は只肉體にのみ満足を與ふるものにして、心靈の上には決して樂みを與ふることなきものなり、心靈のたのしみを共になすは、志のかなひたる朋友と交際をするにあり故に人は何職に依らず深切なる朋友を求め、己れの困難を語り合ふの便あらざるべからず、爰に注意する事は、惡しき朋友を持ちて己れの心も惡しくなりたる例甚だ世に多し、昔の諺に朱に交れば赤くなるとかや、依て友は必ず善良なるものと交るを最も良しとなす。

▲病氣

病氣の多くある家は富者の家なり、何故に富者は餘れる金ありて病氣の親類なるや、要するに美食の寢食程人間の體軀を害するものはあらざるなり、我國に於ては飲食物なくして饑死したるものを聽く事少く、食物を食し過して死したるものは都にも田舎にも甚

だ多くある事を聞く、然らば病氣は外より来るものは至りて少く、皆己れの怠惰心より發するものと云ふて宜しきなり、世の健康を望む人は、醫者に拂ふの金を以て、身軀の運動を適當ならしむる方法に散ずるを要とす。

▲争論

けんくわと云ふは打ち合ひて血を出す斗りではなく、言論に於ても文章に於ても、只心の内に於てもなし得るなり、此けんくわと云ふ事は、何の方法によりて行ふても決して利益のなき仕事にて、反て損のある事と信するなり、言論をなすを口げんくわと云ふて之を一回なすときは容易に前の交際には立ちかえらざるなり、血を出すけんくわなどは論外の沙汰にして、極下等社會の事なり、然し心の内のけんくわは如何なる上流の人とも又之を好くするなり、之は只心の内にのみなれば誰も知らざるものと思ふべけれど思ひの外の事にて此心を持つときは、忽ち顔色にけんくわ色が表はれ、他の方法を以てするけんくわと交際を悪しくする點に於ては少も異なる事なし、依て何れの方法によるもけんくわせざるに優るなし。

▲休息

休息は事業なしたる人に快樂ありて、常に遊び居る人には休息のたのしみを受くる事能はざるなり、事業後のたのしみ休息をなさんとせば、働くべきときにつとめ働くに如かず、然して人間は仕事斗りをして萬事家の發達し得るものにあらず、如何となれば、只仕事斗りをなして、少も精神上の事を考へざる時は、切角骨をりて働きたる事業も何の利益もなくむだばねの損となる事あり、此の故に少くも一ヶ月に二三回は、能く己れの事を考ふる時間を與へ、之を休息時となし、行くべきの道を歩み、爲すべきの仕事をなす事、仕事を成効するに大切なる事なり、世の人は休息時を只逸樂酒食に沈む時となすもの多けれど、是れは眞の休息にはあらず、反て仕事をするよりも悪しき苦しき苦痛を己れに引受るに至る。

▲男女の氣風

現今男女の氣風は、次第に古風とは反對になり行く現象を見る、吾人は古風を好み、文明風をさらふものにあらず、然し此頃は古風にもあらず文明風にもあらずして、男は女

の氣質に近かん事を勤め、女は又可成男の氣風を是れ慕ふ如き形蹟ある事を見るなり、男は可成柔弱の風をなし、女は可成暴々しき風の言語をなし、男女の見別は只髪のあるによりて知らるゝに迄立至れり、殊更此風は東京に於て然となす、如何に女が男の如きを欲するも、一人も軍人たる事を得ず、又如何に男が女の風姿をなすと雖も、決して兒を出産する事を得ず、世の始より男女各々定まりたる天性と職分とありて、別々異なる事は多言を要せざる處なり、此の故に男はいつも男らしくあり度く、女はいつも女らしくあり度き事、尙ほ詳しく云へば、男は男らしく當世の男たらん事なり、女は當世の女らしくあり度き事なり、猥りに人真似をなして大和男女の美性を失はざらん事、是れ最も望ましき次第なれ。

#### ▲家の交際と人の交際

家庭は一己人の集まりたる處なれば、一己人の交際は家の交際と同じ事なるべければ、是を同一にするも差つかえなきものゝ如くなりしも、其實は之を別にせざるべからず、如何となれば、一己人は各々異りたる心を以て居る故に、家に五人の人あれば、此家は五種の交際法をなさざるべからず、斯くなさは家の規律なく、無益の失費甚だしくして家庭は只争論の場所となるべきなり、爰を以て家の交際は、一家中誰の氣に入りたる方向にも歩まず、一家の中立なる交際法を定め置かざるべからず、然し人は甚だ自由なるものなれば各一己人の交際も又なかるべからず、爰に於てか家庭の交際と一己人の交際と自ら異にせざるべからざるに至る。

#### ▲宗教の心得

宗教程心を支配するに強きものはなし、夫故に之を善用せば大効をなし、之を悪用せば其害毒少々にあらざるなり、恰も蒸氣船の如し、其勢力を能く用ゆれば車を走らせ、之に抗せば害を蒙むるが如し、故に宗教心は之れを善用して、一家の發達、人心の改良の方向に向はしむべし、如斯宗教心は人を動かす勢力強き故に、一旦其宗旨に信仰を起したるときは容易に之を變換する事は六ヶ敷ものなり、故に宗教は各人自己の自由に任せ、誰も之を抑制すべからず、帝國の憲法にも、一國の害とならざるものは各自の自由に任せたり、家庭に於けるも此旨を奉じて、一家の害とならざる限りは之を自由にする

方針こそ最もよろし。

▲失敗の來る源

失敗の來る源として數ふれば、第一怒り易き事、第二物に忍耐なき事、第三人を容恕す廣裕なき事等は重なる失敗の源由なるが、之等の事を皆能く心得ても尙ほ失敗の來る事あり、是は凡そ一方に傾き變ずると云ふ事也、如何に物事に熱心に働き、如何に忍耐と裕簡と怒りとの次第を知ると雖も、若し物の中庸と云ふ程能きかげんを知らざれば、皆むだの骨折となるの恐れあり程能きかげんとは、云ふべきを云ひ、始むべきを始め、終るべきを終へ、黙すべきを黙し、笑ふべきに笑ひ、泣くべきに泣き、怒るべきに怒り、ゆるすべきものをゆるし、愛すべきものを愛するにあり。

▲目的を定めよ

人の一生は、恰も船を此岸より彼の岸につくるが如し、船を此岸より彼の岸に達せんとするには、先づ始めに方向を定め、遂に此方向に走らしむる舵と云ふものを用ひて、船を自由に動かす、又船長なるものありて、之を命令し、常に蒸氣を以て其勢力を用ひ、

又水中に隠れたる岩あるを恐るゝが故に、其路を善く調べて進行す、人の一生も是と同じく、何々の方向に向ひ進まんと、先づ始めに之を定め、常に心の内に熱心の蒸氣をもやし、精神は自己が船長にして凡ての事を命令するものなり又世の中には人浪と云ふ浪多くありて、凡ての人の善事を害せんとするものあり、又形面には少しも知れざるかくれ岩の如きものありて、余々の知らざる内に余々の事業目的を破壊する事あり、此の故に常に心の船長は、自己が身の事、事業の事、世の中の事、交際する人々の事、時勢の事自己を害するものゝ事、自己を助くるものゝ事、自己が命令を奉ずるものゝ事等を能く考へて世に立たざれば凡ての事をあやまつに至る。

▲心的食物

料理の事を談ずるものは食して其美味を覺らず、名利の談を厭ふものは反て名利を心に於て慕ふ。人々有字の書を読む事を知りて無字の書を読む事知らず、有絃の音楽のみを聽きて無絃の音楽を聽かず。人は皆人の過失を見る然し己れの過失を見るもの少し、人を教ふる事を好む然し己れを教ゆる事を好むものなし。天子の呼吸する處の空氣も乞

食の呼吸する處の空氣も少も異なる事なし、人物となるは世を離るゝの謂にあらす、濁世に交りて之を改むるにあり、美花を見れば之を植ゑん事を思ひ、惡を見れば之をさけん事を思ふ、是れ之を人情と云ふ、人情をなす少も難き事にあらす、竹の影楷を拂ふて塵少も動かず、月輪沼を穿ちて水に痕跡をとめず、魚は水に居りて水を知らず、鳥は風に乘じて飛びながら風あるを知るなし。河に臨んで魚をうらやまんよりは家に歸りて網を製するに加かず、自ら立てりと思ふものはたをれざる様謹むべし、一善起れば一害生ず、人生一日も氣を安くするの時なし、目に種々の惡を見て心に其惡を感せず、口常に俗談を充たすも常に靜淨を失はず、耳に惡聲を聽きて心之が淫になじまざる、是れ之を處世の大道と云ふ。心の食物とは、則ち安心と立身の道を聽きて心中に止むるを云ふ。人は定業なかるべからず、定業なければ不愉快常に絶ゆる事なし、己れの怒りを制し得るものは大人の働さ也、人の過失を見るは簡に、己れの過失を見るは嚴にすべし、凡ての肉慾を制し得る人は眞の人物なり、人肉慾を自由にする事能はざるは繁忙なる事業にせまらるればなり、故に人は常に繁忙なるに如かず、智慧ありて己れ智慧あるに氣付かず、

謙遜家にして己れの謙遜の足らざるを知るは眞の大道徳家なり、人情反覆秋の天氣の如し、赤心を以て人を取扱ふは宜し、赤心を人に語るは危険なり、目に疑を受ければ物を見る能はず、耳に病を受くれば物を聽く事能はず、胃の病に罹りたるものは食物を消化する事能はず、心の病に罹りたる人は全身を自由ならしむる事能はず、肉の病は醫者を招きて之を治す、然し精神の病に罹りたるときは、之が醫を招きて治療せざるのみならず、反て傲慢無禮を働き、己れより他に人なきが如く世を濶歩す、書を讀んで之を行はず、人物の行ひを賞して之が精神を學ばず、皆風の吹き去るが如く耳輪を動かすのみにして、心に沈靜して顧みるものなし、貧苦饑寒の憂たるを知りて、富貴榮達の尙ほ之より憂多きを知るものなし、人を責めず、人の陰私を發かず、人の舊惡を思はず、此三者を實行せば害に遠かるべし、

▲道理の應用

道理ありと雖 吾人の心に渡らざれば其用をなす事なし、吾人心に之を了解すると雖も之を實行に移さざれば亦其効用少もなし、之を實行に移し、之を活用して始めて己れを

益し、人を益し、社會を益し、道理の人生間になくてならぬ事を深く認識するに至るものなり、此道理を吾人の心に映し、心より之を手足に移し、之を事物と社會に應用する之を實業と云ふ、其實業の有形的實體を技術と云ふ、然らば技術は道理を吾人の手足に降誕せしめたる真理なりと云ふて不可なきなり。如斯なるが故に實業の實體は技術にあり、技術の本は吾人の心にあり、心の元は道理にあり、理學にあり、化學にあり、而して理學化學は技藝の出づる源を主り、道理は之を實行に移して成效あらしむる勢力動機を主とするものなり、理學化學を離れて事物の性質應用を知尋し難く、道理を離れては之が成效の生命なし、世に事業を成效したる人は理化學を知りたる外に道誼を識り、人情を識り、社會を識り、己れの分量を識りたる人なり、人情を知らざれば人に對する事難く、社會を知らざれば社會に投ずることなく、己れを知らざれば人と社會に如何なる方法と順路より始むべきかを知るに苦むなり、此三者を識りたる人は事業の必勝者にして此内一を缺きたる人は事業の失敗者なり、失敗の起る所以なきにあらず、成效の來る所以なきにあらず、必ず其由て來るべき理由あるものにして、偶然と只來るものにはあらざるなり、失敗の起るは己れの修養の足らざるより來り、成效の來るは萬端の順序宜しきを得たるに出づ。

▲言語

吾人の思想を發表するは文章と言論となり、文章は誰にも草し得らるゝものにあらず、言語は誰人にも成し得らるゝものなり、文章は名譽ある人にあらざればなし難し、然し言語は生命あるものは何人にも發表し得らるゝなり、之に由て之を考ふれば、思想を發表するに言論より簡易なるものはある事なし。言論は己れの思想を發表するのみならず、己れの體軀を保護するの利器なり、人生は善惡混合の社會にあるものなれば、人に惡疾せらるゝ事より心ならざる事を言懸けらるゝ事あり、又讒せらるゝ事あり、人に誤解せらるゝ事あり、此時に當り、己れの名譽を保護し、精神の存する處を發表するは、只此言論によりて得らるゝのみ、世間言論に拙にして己れの言ふべき事を言はず、己れの權利を主張せずして、不幸の位置に陥りたるもの多し、是等は皆言論を輕んじて、己れの意見を陳述する事能はざるより起りたるものなり。言語は己れの意見を陳述するのみならず、

らず、人に快樂を興ふるものなり、只意見を知らずのみならば、書面を以て知らずるも使を以て通ずるも、差問なき筈なり、然し言語には生命ありて存する故に、書面に用事の便し難き事も、使にて處用の通せざる事も、己れ自身對者に相面して熟話するときは格別爰ぞと云ふ程の書面にて通知すると異なる事あらざるも、忽ち用事を辨ずるに至るものなり、然し之に反して、若し談話を甚だしく拙にするときは、反て人をして悪しき感じを起さしめ、不意の波濤を起し、互に相敵視するに至るものなり、言語の修養輕んずべからざる事、夫れ如斯、商業上の大秘密は、言語にあるとは老商の深く經驗せし處なり。交際上の聯鎖として言語に重きを置きたるは、交際家の常に修養する處なり。名譽と權利を保護するは、言語の外他に用ゆべきものなし。家庭の快樂を増すは、情厚き言語の外他に需むべからず。斯の如く言語は立身の大道人生の目的を買ふ處の必要物としてあるに關らず、世人の言語に重きを置かざるは解せざる次第なりと云ふべし故に茲に言語の大秘訣を示すべし、言語の源は吾人の心にあり、未を明にせんと欲せば源を明にせざるべからず、未流を潔めんせば、源泉に汚物を投せざるにあり、

言語の序を置かんとせば、吾人の心を端正にするにあり、心正しければ舉動正しく、心商界に通ずれば言語商界に通じ、心友誼を重んずれば言語交際の節に應ひし、心念に正義と義理を重んずるの精神充つるときは期せずして事理を辨解し得るの正鵠に的中するものなり、此心を修養する事を外にして、容態を作る事の末技を學び、之によりて言語の雄ならんことを需むるものは、恰も源泉に汚物を投じて未流を聖潔ならしめんとするに等し、爰に其例を界解して示すべし、或人甚だ金錢に窮し、或る友人の處に金子の借用に出發す、此時此貧人の發する處の言語に起端あり、狀況あり、理由あり、辯解あり、説明あり、決尾ありて、其辯説はマホメットも及ばざる程の雄辯なりしと云ふ、此貧者は固より雄辯法を學びたるにわらず、彼れは學識あるにわらず、只彼れは平素の貧困身に徹して、今は脱るゝに道なく、眞に窮したる處の眞實に迫まられて語りたるならん、然るに斯く規律ある言語を用る事を得たるは、全く眞の實を語りたるに外ならざればなり、言語の秘密に達するは恰も如斯ものにして、心と精神を先づ眞實にせざれば如何に末技の手足を動かさんとするも決して完きを得ず。

▲道徳と禮式との調和

道徳學と云ひ、宗教と云ひ、禮式と云ひ、論ずる處説明する處は異なりと雖も、皆人道を説明するの一端に過ぎず、禮式とは東洋に最も多く、西洋には少く、其源は支那聖人の道に紀元を起し、今日迄傳はるものなり、道徳學とか宗教學とか云ふものは、西洋にも東洋にもあれども、重もに此名稱の下に人心の改良維持を圖るは、殊に西洋國に於て然りとせず、孔孟の禮式を重んじて、之れを人民の風俗となしたる其精神は、凡人は皆一様に倫理の奧義を知尋し、人道を遵奉することは至りて至難のことなり、只だ是は聖者賢人のみに能く行なふことを得るものなり、普通人民には如斯至難の事を教ゆるよりも、先づ斯々の事をなすは禮にあらざるとして、器械的に、之も禮にあらざ彼れも禮にあらざ、禮を缺きたるものは人にあらざと、恰も政府の法律の如くに人をして守らしめたるものなり、西洋の倫理道義學は之と反して、何故に男女席を同ふるときは誤り起るか、何故に父母を敬せざるべからざるか、何故に夫婦の大倫は破るべからざるか等の起る倫理を講し、斯々の理由ある故に父母を愛せざるべからず、朋友に信義なかるべからず、男女席を異にせざるべからずと、其道理を細かに解明して教ゆるものなり、要するに西洋は其道理を教えて道に従はしむる禮式なり、東洋は禮式を器械的に注入して、道に苟も従はしむる倫理なり、兩者其方法を異にすと雖も、其精神に至りては以て異なる事なし、一は内部より教へ、一は外部より之を教ゆるのみ、此故に支那及本邦の禮式を廢するにも不及、西洋の倫理學を蔑視するにも及ばず、兩者を應用して以て道に達すべきなり、殊に我邦の如きは兩者を互用するの必要あるものなり。

▲文章

吾人の思想は言語と文字の二種によりて發するものなり、言語によりて發するものを演説と云ひ、文字によりて發するものを文章と云ふ、演舌に律あるが如く、文章にも亦律なかるべからず、演説に順序あるが如く、文章にも又順序なかるべからず、律あり順序ある文章を能文と云ひ、又は傑文と云ふ、文章は恰も動物の如くして、首と體と尾とを有するものなり、首は初にあり、體は中にあり、尾は末にあるものなり、動物に尾の頭にある動物あらば、人之を異む如く、文章にも結尾を初めに論ずるときは甚だ心得ぬ



ものとなるなり、又頭を餘り大きくして胴を餘り少くするとき、文章に勢力なく、遂に雄文の價値を失ふに至る、尾を大にして首を小にする事も之と同じ、其要は首尾其平均を採るにあり、其構造を界記せば

- 首 主要なる事を簡短に記す
- 體 狀況理由説明或は辯解を記す
- 尾 總主意を結ぶ或は注意を殘す

凡て文章は三段論法によらざるべからず、三段論法の例を示せば

- 第一段 義人は凡て人に尊敬せらる
- 第二段 楠正成は義人なり
- 第三段 故に楠正成は人に尊敬せらるる也

此三段論法は文章全體に應用すべきものにして、首となるべき部分に三段の論法にて書し、體となるべき部分も三段論法にて書し、尾となるべき部分も三段論法にて書し、而し此首の三段あるものを文章大構造の第一段となし、此體の三段あるものを大構造の第

二段となし、此三段ある書の尾を又大構造の第三段となすものなり。

苟も文章と云つべきものは、皆文法には合したるものなり、然し今日迄雄筆文の人の記稿するを見れば、是は第一段、是は第二段の分と別々に裁縫師のたちものをするか如くに文章を削するものにあらず、只彼れは口より腦髓より流れ出づる儘に之を筆に記するのみ、之によりて之を見れば文章構造法の如きは、此術に達するの末技にして、此に論ずるの主要にあらず、然らば文章を雄ならしむる主要とは如何なるものを云や、是れ最も簡易なる事にして、最尤も不正義のものに至難の事なり、文章墨や筆より出づるものにあらず、筆を採る人の精神より出づるものなり、然らば達文者たらんと欲せば、達文者の精神の如何なる方法によりて修養せしかを研究するにあり。

▲生理學の應用

生理學は人身の構造を研究して、健康を持する爲に講ずるの學なり、是れ誰人も此定義に異議を唱ふるものなからん、然し此生理の奧義を修得したるものも甚だ不健康にして生理學に甚だ不明なるものと少も異なる事なし、現今の狀態を見れば、生理を知らざる農

夫や工夫の、反て生理學者より健康なる事を實見す、是れ最も憂ふべきの弊害なり、學術は決して批評にあらざるなり、斯々のとき斯々の事をせば宜し、斯々の病氣は何の失策より起るなどと、只批評的に器械學を學ぶ如きものにはあらざるなり、食慾を減ずれば胃病を起さざるを知れども、只之を知るのみにして食を節するの勢なし、淫酒に沈めば身の甚だしき疲勞を來し、様々なる病氣を發するを知れども、只是を知るのみにして之が慾を制するの克己心なし、然らば百萬の生理書を讀むも、己れに益する處は少くなきと云ふも失言にはあらざるべきならん、然らば身の健康を保つは、生理學を知りたるのみならず、之を知りたる上尙は知りたる事を實行せしむる處の能力を學ばざるべからず、此能力は何れの處より來るか、是れ諸君の是より學ばざるを得ざる問題なり。

▲家の夜分

夜は仕事を休みて眠るとき、然し此夜こそ晝間の仕事を用意する大切なるときなれば、此時の経過を只眠りにヨリ費すべからず、又家庭の快樂も多く此時にあるものなれば、夜分は可成皆己れの家に集るを要す、夫婦親子皆一堂に相集りて、快談に時を費やすの

樂みは、不信切なる他人の交際にまさる幾何なるを知るなるべし。

▲職分

一家の事業は一人にて成し得らるゝものにならず、皆の人相集りて一の事業をなすものなり、故に一人の掌どる處の仕事をおこたは、他の人も仕事をなす事能はざるに至る、夫れ故に己れの受け持ちたる仕事を廢するか、又は怠るは、只己れの仕事を爲さざるのみならず、他人の仕事も妨害するに至る、故に各々受持の仕事は怠る事なく、必ず盡さざるべからず、斯く各自自身の仕事を職分とは申なり、是を家に盡す職分といふ、家族のものは誰も此職分をなさざるべからず、此職分を怠るものは家を破るものなり。又天より與へられたる職分と云ふは、各自の心の上に己れが好む處の精神として分與せられたるものを云ふ、假令は文學を好むものは如何なる事あるも文學を學び、商業を好むものは如何なる事あるも商業家となる、是れ天與の性に從ひたるなり、天性に從ふて其事業をなす、是を天賦の職業と云ふ。

▲習慣

習慣は第二の天性を造る程なる力あるものなれば、少年のときは規則立ちたる正しき定めに従がひ良き習慣を造るは至りて大切なることなり、少年のときは、恰も白き糸の如きものにして、青くも、赤くも、黒くも染めらるゝと同然、善良なるものにも、怠惰なるものにも、勤勉なるものにも自由に養生する事を得るものなり、此大切なる時期にありては、わづかの事なりとも怠惰なる習慣しをなすは宜しからず、中年に至りてなす事を知らず、居ながら不幸に不幸を招くものは、皆少年のときの習慣の悪しきによりて、遂に習ひ性となり爰に至りたるものなり。

●家庭叢話

▲韓伯瑜母に答れて泣く

支那の韓伯瑜と云へる人あり、常に母に答るゝ事あるも泣きたる事なかりしが、或とき答る事ありて泣く事甚し、母怪みて其故を問ふ、彼れ曰く今迄答るゝときは甚た痛さを覺ゆれど、今の答るに少も痛き事なし、是れ母の年老ひて、力の衰へたる

ならんと思ひ心弱くそ思なり。

▲新四郎老母に米價を知らしめず

近江國坂田郡友村の人新四郎と云へるあり、家赤貧にして母を養ふ、或る時饑饉に當り米價高直となれり、困苦夜を徹して漸く母の衣食をつなげり、母は心配して其故を問ふ然し母をして憂なからしめんが爲に米價を知らしめし事なし。

▲源三郎母の爲に商に出でず

紀伊國名草郡和佐中村の百姓源三郎と云へる人あり、母の好まざるを以て利益ある商業あるも遠方に旅をなさず。

フレデリキ第一世、或時鐘を鳴らして従者を招けども來らず、王之を怪み室に行きて之を見る、然るに従者は熟睡せり、時に王従者の懐より書狀の落ちんとするあり、王之れを探り見るに母よりの來狀にして、薄給の内より殘し送りたる若干の金員に對し、喜びの情を細かに記しありたり、王彼れの孝心を感じ、金貨一百金を狀中に入れて返り、又強く鐘を鳴らしたり、従者驚きて王の前に至り、懐中の重きに氣付き流涕して罪に

陥おとしられんとして悪徒あくとに計はかられしを憂うれふ、王笑わらて曰いはく憂うれふ勿なか、余われ汝なんぢの夢中むちゆうに汝なんぢの母はよりの來狀ちいじやうを見て汝なんぢに送おくりしなり、之これ神かみよりの賜たまなれば汝母なんぢはに送おくりて孝養かうやうし、後來こうらい尙努力なほどりよくせよと。

▲孝女米石を腰に縛ばくして舂つく

周防國すおうのくにの孝女かうぢよ米石よねいしは六才ろくさいにして母はに死しに分わかれ、父ちちに事つかへて孝かうなり、家素いへもとより貧まうし、或時あるとき父病ちちまひに罹かり、日ひに人ひとのために米こめを舂つく、然しかるに軀く小力せうちからびにして其業そのげふに堪たえず、自みづから一方いほうを案あんし、石いしを腰こしに縛ばくし、其體そのたいを重おもくして舂つく、夜よは又紡績またくりいとして晨あさに至いたり、僅わずかに父ちちを養やしなふを得えたり時ときに年十二としじふに。

▲古嗣書ふるつぐしよを讀よみて父母ふぼを思おもふ

左京さきやうの人山田ひとやまだ古嗣ふるつぐは承和しやうわの比阿波ひあはの介かみとなりて其政績世そのせいせきよに聞きえたり、古嗣幼ふるつぐおきなきとき母はを失うしなふ、嘗かつて書しよを讀よみて樹靜きしじやうまらんと欲ほつするも風止かぜやまず、子養こやしなはんと欲ほつするも親待おやまたずといふ一句いっくに至いたり、亡なき父母ふぼを思おもひ出いで、流涕書りうていしよの濡ぬるゝを覺おぼえざりしと。

▲鼠ねづ其親みのおやを負おふ

亞米利加あめりかの商船しやうせん嘗かつて西班牙國しぱいんこくに向むけて航海こうかいせしとき、船中せんちゆう鼠多ねづおほく生なじければ、硫黃いわうを燻くべて之これを塵ちりにせんとせしが、一疋いっぴきの鼠ねづ一鼠ひとねづを負おひつゝ甲板かんばんじやう上に驅かけ出いたりしかば、人々ひとびと不思議ふしぎに思おもひ打寄うちよりて之これを見るみるに、負おはれたるは老鼠ねづにて、兩眼りやうがん盲めしたり、されば負おひたるは子鼠こねづなるべし、今いまの危あやうきに際さいして其親そのおやを安心あんしんの地ちに避さけしめんとするに疑うたがひなしとて、孰いづれも感歎かんだんし放はなちやりしと。

▲ルウキズルウキズの孝

佛蘭西ふらんすのルウキズルウキズといふ女子をなこは、二十歳にじふさいの比父ひちち斗からず兩眼りやうがんを失めしひとなりたれば、ルウキズルウキズ父ちちの不自ふじ由ゆうを察さつし、深ふかく之これを憂うれひ、自分じぶんも亦また之これより安樂あんらくに世よを渡わたるの念慮ねんりよを斷たち、只ただ管父すんぷの助すけを事こととし、或ある時は庭園ていゐんに徘徊はいくわいし、或ある時は野邊のべに逍遙しやうようするも、必ずかなら我身わがみを父ちちの杖つゑとなし、種々さまざま物語ものがたりして父ちちを慰なぐさめければ、父ちちは少すこしも其不自そのふじ由ゆうを感かんせず、常つねに喜よろこびけるとぞ。

▲藤原吉野ふぢはらまし修身肉しうしんにくを食くらはず

吉野よしの天性てんせい至孝しかうにして朝夕あさゆふ父母ふぼに對たいして寒暖かんだんの禮らいを盡つくさゆるることなし、或時あるとき吉野鮮肉よしのせんにくを求もと

めありしが、其父之を求む、厨人吉野の不在なるを以て與へざりし、吉野歸り聞きて大に悔いて、恨みつ、流涕して止まず、是より修身肉を食はざりしと云へり。

▲幾美の孝烈暴狼を退く

幾美は備後國の民家某の女なり、年十四の時母に従ふて薪を山中に採る、忽ち一狼の突出するあり、母驚きて仆る、狼其上に座す、女之を見て急に一杖を抜き、力撃して其脊に中つ、狼轉顛して溪澗中に墮つ、女即ち水を掬して母に含しめ、氣息漸く蘇す、遂に扶けて家に歸る、實に寛政三年四月の事なり、一郷舉て其孝烈を稱すといふ。

▲獵夫母夫の慈愛を感ず

羽後國鳥海山の麓に獵夫あり、一日例の如く獵銃を携へ深山に入りて何がな獲物あらんと、此處彼所を徘徊せしが、遙か谷間を見おろすに、一疋の大熊大石を抱き上ぐるあり、獵夫は夫き獲物なりと狙を定め、一發を放てば狙ひ違はず大熊の眉間を打ち貫きたり、然るに彼の熊は尙始めの如く大石を抱きたるまゝ動かず、獵夫は深く之を恠み、徐に山を下りて之を見るに、熊は斯に死したれども、小熊其石の下にありて澤蟹を拾ひ居たり、此に於て獵夫大に感悟し、遂に發心して獵業を止め、農夫となりたりとぞ。

▲的を外して兄弟相讓る

昔し或る弓術家に兄弟二人あり、父の訓を守り、弓射る事を勉めて共に其術に長せり父は其術の優れたる者に家を繼しめんと思ひ、二人の優劣を試みんとて、或日之を伴ひ山に行きしに、遙かなたに鳩の遊び居たりければ、父は二人に之を射よと命じたり、然るに二人は父の志を察し、兄は弟に、弟は兄に、之を射させんとて、互に之を射外づけしければ、父は其志に感じて、遂に家産を兩分して二人に與へたり。

▲義光官を棄て、兄の軍を援く

源義家、清原武衡、同家衡と陸奥に戦ふ、其弟義光時に右兵衛尉となりて京師に在り兄の軍利あらずと聞き、奏して赴き援はんと請ふ、許されず、乃ち官を棄て、之に赴く義家大に喜び、且つ泣いて曰く、吾汝を見ること猶先君を見るが如しと、乃ち俱に進み武衡を責めて之を破ることを得たり。

▲泰時の友情

北條泰時は常に能く諸弟妹を愛す、父義時卒す、泰時領地を諸弟妹に分與して自ら受くる所甚少なかりければ、政子之を見て、子は嫡子なるに其受くる所甚少きは何故ぞと問ひけるに、臣不肖なれども執政の重任を續ぐ、領地の如きは臣の欲せざる所なり之を分配して諸弟妹を喜ばしめば足れりといひければ、政子大に賞美したりしとぞ。

▲兄弟畫像を射て孝悌の者となる

亞刺比亞に一の富豪家あり、二人の男子を持てり、其兄弟常に和せず、父は百歳の後家を傳ふるの方如何せん、憂悶の餘遂に病を得て起たず、死に臨て二書を遺して曰く、眞に我子たるもの之を取れ、其子たると否とは有司の判決を仰ぐべしと、兄弟其書を讀み、直に有司の審判を請ふ、長子は父の畫像を携へ謁り、是我が先考の肖像なり、兄弟孰れか能く之に似たると、有司之を視るに相似て辯じ難きに苦しむ、因て長子に問ふて曰く、汝が父何の藝あるや、曰く射を善くせり、有司曰く然らば射を以て判決せんと二人をして肖像の瞳子を射さしむ、兄は先づ射て左眼の瞳子を貫きたり、次に弟代りて射んとして俄に涕を流して有司に謂て曰く、嚴命重しと雖彼の眼は昔日以て我を愛せし者

なり、畫像と雖我之を射るに忍びず、遺物の如きは今吾得ん事を願はず、唯閣下我を免して射を試みざれと、是に於て有司曰く、汝は孝子なり、眞に汝が父の子なりと、終に遺物を以て悉く弟に與へけるに、弟は兄に讓て受けず、兄も亦弟にゆづりて取らず之より兄弟相和して終に争鬪するとなしとぞ。

▲群燕網を切りて友を救ふ

佛都パリスの或學校の梁上に燕巢を作り居りしが、或日誤て網の目に足を踏み入れ頻りに羽叩して身を脱せんとせしかども抜け得ざれば、甚困却しけるを、其處此處より數多の燕飛び來り、代るゝ羽を揮て網を磨り切り、遂に彼の燕を救ひ出せりと。

▲蘭丸の正直菊の數を答へず

森蘭丸長定幼にして織田信長に近侍せり、一日信長圃に入りしに、蘭丸其佩刀を持ちて外に侍しけるが、何心なく刀鞘數を計へ居たり、信長之を圃中より見る、後近習の者を召し此刀鞘の數を言ひ中つる者には此刀を與へんと仰ありければ、皆推測して其數を言ひ出づれども、蘭丸初めより一言を發せざりければ、汝は何故に言はぬぞと問ふに、

臣前しんさきに既にすでに數すうを計かへて記しす、今いま知らざる爲ためして答こたふるは是これ君きみを欺あざむくなりと、信長のぶなが其正そのせい直ちかなるを賞しょうし其その刀かたなを與あたへしとぞ。

▲壯士さうし生せいを捨すて、義ぎを取とる

伊勢いせ北畠きたばたけし氏の亡ほろぶる時とき、具教ともりのの弟あとうと具親かよしま義政あつを集あつめ、六呂木ろき、山副やまぞへ、波多野はたのの三人さんにんをして瀬峰せみねに據より義ぎを唱となへしめたり、織田おだ信雄のぶを三人にんを捕とらへて斬ざんに處しよせんとせしが、波多野はたの時に年十五とし、容儀やうぎ美みなるを以もつて信雄のぶを之これを愛あいし、殺ころすに意いごなかりしが、六呂木ろき、山副やまぞへも亦また勸すすめて曰いはく、老年ちうねんの余輩よはい餘年よねん惜おしむに足たらざれども、子しは年少ねんせうなり、生せいを全まうして他日たじつを期きせて曰いはく、波多野はたの肯かえんせずして曰いはく、諸君しよくんと心こころを一ひとにして事ことを同おなじし、既にすでに此こゝに至いたり豈あに獨ひとり免めるべけんやと首くびを駢ならべて斬ざんに就つけり。

▲李白りはく姫おうの鐵杵てつひを磨みがくを見て業卒げふをる

唐たうの李白りはく少年せうねんの時とき學業がくげふ未まだ成ならず、業げふを捨すて、歸かへる、道みちにして一ひと姫おうの鐵杵てつひを磨みがぐに逢あふ、李白りはく之これに何なにをなすやと問とふ、姫おう曰いはく針はりを作つくらんと欲ほつすと、李白りはく其言そのげんに感かんじ、遂つひに還かへりて業げふを卒をれり。

▲雅信まさのぶ人ひとに先さきちて入いり人ひとに後おくれて出いづ

源みなもと雅信まさのぶ能よく官政くわんせいを調治ちやうぢすること老吏ちやうりと雖いへども及およばざる所ところなり、或ある人ひと其故そのゆゑを問とふ雅信まさのぶ答こたへて、我われ不才ふさいにして宗籍そうせきに列けつせしを以もつて、人情にんじやうせい態たいを諳知あんちすると能あたはず、故ゆゑに朝廷てうていに出勤しゆつきんするには必かならず人ひとに先さきちて入いり、人ひとに遅おくれて退しりぞく、凡およそ人ひとは何事なにごとにても忍耐にんたいすると能あたはずれば、如何いかに才識さいしき智ち能のうありとも事理じりに通達つうたつすると能あたはず、古人こじん云いはずや、人ひと一ひとたび之これを能よくすれば己おのれ之これを百ひゃくたびし、人ひと十じゆたびにて之これを能よくすれば己おのれ之これを千せんたびすと、吾われ不敏ふびんなりと雖いへど、此言このことを服膺ふくじやうして敢あえて忘わすれざるなりと云いへり。

▲フランクあやまち過あやまちを自白じはくす

ロベルドろべろど、フランクふらんくの二兒にこ共にいっしょに犬いぬを弄たわせ戯たわせけるが、牛乳ぎうにふの瓶かめを覆たをし、瓶かめ忽かたち破われ、牛乳ぎうにふこぼれたり、二兒にこ相見あひみて大おほいに驚おどろき如何いかせんといふに、フランクふらんく曰いはく、早はやく父ちち母ははに告つげ之これを謝しやすべし、母常はつねに過あやまちを隠かくすと勿なかれと云いひたりと、然しかるにロベルドろべろどは猶なほ豫よして往ゆかず、反かへつて罪つみを犬いぬに歸かへしたり、フランクふらんく獨ひとり走はしり行ゆき、其過そのあやまちを謝しやしければ、父ちち母はは其誠直そのせいぢやくを喜よろこびて大おほいに之これを賞しょうし、ロベルドろべろどの不實ふじつを叱しつして之これを罰ばつしたり。

▲ワシントン粗暴の舉動を謝す

ワシントン幼きとき學校に通學せしとき、一日非禮を教師に加へられ、憤懣に堪えず、  
脆然として立ち忽然帽を把りて地に投げ、直に門外に馳せ去れり、教師は其怒の劇しき  
を見て之を憂へ居たり、ワシントンは既に校門に出で、疾走して池畔に至り、青草の上  
に投じ、身體を和風に曝して以て怒火を消滅し喟然として嘆じて曰く、嗚呼我過てり、  
返りて罪を謝するに如かずと、復學校に向て走せり、直に教師の前に至り、辭を卑ふし  
禮を厚ふして、深く己の罪を謝せしとぞ。

▲彦兵衛の熱心

名取彦兵衛は甲府山田町の紙商なりしが、我國製絲の法は多く人力を費して粗悪なるを  
憂ひ、自ら本業を廢して心を製絲の改良に凝し、遂に器械を造りけるが、未だ完全なら  
ずして金錢を費すこと、多けれど、更に屈せず日夜心を悩まして、再三工夫を加ふると  
雖精巧ならず、之によりて家産殆ど傾けり、人或は之を誹りて痴と呼び、狂と呼びけ  
れば、家族の者も之を憂ひ、屢々本業に復せんことを勸むれど、曾て志を撓まさずして

益之を講究せり、之を以て親戚も交を絶ち、管店も暇を乞ふに至れり、然れども彦兵  
衛益志を固くし、資産の盡くるを顧みず、數年の刻苦により遂に精妙を極め、我國輸  
出の製絲中、第二位に居るに至れり、依て官之を賞して金圓を玉はりしとぞ。

▲英主蟻を見て感發す

鞏鞏國テムールは一時英石を亞細亞に轟したる人なり、或時の戦ひに敗る、獨り身を  
脱して草舎の中に潜伏したるが、壞壁の下一蟻あり、麥粒を壁上に輸ばんとするに、中  
半にして地に墮すと六十九次なり、されども更に屈せず、遂に七十次にして壁上に達す  
るを得たり、テムール王は之を熟視せしが、忽ち奮勵して謂らく、一昆蟲尚此の如し  
況んや人をやと、再び志氣を振ひ出で、敗兵を收め、遂に敵國を破り、其國を興せり  
とぞ。

▲王榮路人に燈を與ふ

宋の玉榮家頗る厚し、子なきにより務めて善事を行ふ、嘗て大燈を要路に建て、月暗  
き毎に點じて行人を照らす、又小燈數百個を設け、暗夜遠く歸る者に遇へば之を給す、



天雨降れば木屐雨傘を施す、此の如くすること數年、連りて二子を生む、聰明穎偉にして皆進士となる。

▲傳六能く貧者を恵む

江戸淺草三間町に質取ることを業として世を渡る、傳六といふ者ありすべて商人は利を重んずる習ひなるうへに、貧しき者の質とりて金を貸し、世を渡るは猶更なるべし、然るに傳六は其家業に似つかず、篤實なる本性にて、貧しき輩には質物の直の外にも心をつけて貸し與へ、召使へるものを憐み、門に立て物を乞ふものあれば、常に施し四年前の凶年に世の中困みしときは、糊たきて人に食はせ、近里の者のいたく貧しき者に、米、味噌、薪など贈りけるが、晝は人目を憚りて夜々竊に與へたりとぞ。

▲仁徳帝の御仁徳

仁徳天皇難波の高津の宮に在せしが、一日高臺に登り遠きを望ませ給ふに、炊烟の起らざるを見て人民の貧しきを憐み、三年の間悉く課税を除き、親しく衣食を節し、宮垣瀕るれども繕はしめ給はず、而して後風雨時に従ひ五穀豊穰り、百姓の歡聲路に盈ちたりと云ふ。

りといふ。

▲名醫運動を奨め病を治す

英國海濱の一部に、消化器不良を治するに大名を得たる一醫あり、患者を療するに別に薬石を用ひず、只飲食の節度と戸外の運動とを勧めたり、或日中年の人來りて治を乞ひたりければ、之を診見して是富人にして、進退に車にのり、榮耀の事何れも辭せざるを知り、共に馬車にのりて數里を驅ることをすゝめ、凡そ五里も隔りたるるとき鞭をおとし患者に下りて取らしめ、患者馬より下るや否や君步行して歸るべしと云ひ捨て、家路に向て馬をかりたり、患者止を得ず步行してかへりけるが、忽ち飲食の甘味を覺え、醫師の方便を大に感じ、爾後常に戸外に運動しければ、終に病を全治したり。

▲雞餌に斃る

或田舎に老婆あり、家に雞を飼養し、毎日麥一合つゝを其餌に與へ、毎朝一個の卵を産ませけり、老婆思へらく、之れ日に三合の麥を與ふれば必ず二個の卵を得んと、雞の欲せざるに無理にも口を開かせ、彼の麥を以て一度に食はせしに、其夕雞の腹ふく

れて遂に死に至りしと。

▲忠清節儉袒服を補綴す

酒井忠清は幕府の執政として威權肩を併ぶる人なき程なりき、或時殿中にて汗出でければ袒服を脱ぎて欄頭に曝されしを見るに所々補綴せしものなりしと。

▲忠貞綿衣を以て納徴となす

酒井修理太夫忠貞、其婚娶の前に當り、木綿衣十領を以て納徴とす、老臣等怪み問ふ、忠貞曰く孤が藩士を撫育し、且つ公に對して其職を盡さんと欲せば、則ち節儉を事とするに若かず、故に孤も亦恒に綿衣を服す、又我妻たる者をして能く此意に従はしめざるべからず、若し之を否まば離姻するの一事あるのみと。

▲黒木御所民に儉を示す

天智天皇の儲貳たり玉ひし時、西征に従ひて行宮を筑紫の朝倉山に營まれしが、庶民の疲弊せんことを恐れ用ふる所の材木は鹿皮を斬らず、務めて質朴にし玉へり、故に百姓悦服し、黒木の御所と呼、又木の丸殿と稱せり、皮を帯びたる黯黒の丸木を用ひ、殿材となされしを以てなり。

▲張文節儉素以て常久を戒む

明の張文節相となり自ら奉ずること甚儉なり、衣は新なるに易へず、食は味を兼ねず或人之を諷す、文節曰く吾今日を以て一家舉て錦衣玉食するも何ぞ給せざるを憂へん然れども人情儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し、若し子孫奢に習ふこと己に久しければ、頓に儉なること能はず、必ず所を失ふに至らん、我法を儉になし、子孫をして奢に習はざらしむ、豈に常久の道にわらずや。

▲馬夫夜を冒して金囊を主に還す

寛政年間近水國高島郡に廉直なる馬夫あり、其話の次第を擧ぐれば熊澤了介始め京都に來り、良師を求めしが、未だ良師を得ずして族宿せしに、同宿の者語りけるは、予往日家主の爲に遠行せり、時に家主より齎せしところの金二百兩を携へしが、途中にて驛馬にのり、其金囊を馬鞍につなぎ、日暮之を收むることを忘れて旅宿に投じ、其儘寢に就けり、夜半に至り始めて金囊を遺却せしことを覺り、今更之を復するに由なく、進退

谷まり、既に死を決し、自ら悲嘆し居たり、時に旅店の戸を叩くものあり、之を問へば即ち馬夫某なり、因て速かに出で之を迎へければ、馬夫は金囊を出して曰く、小子家に歸り馬を洗はんとして鞍を見れば此金囊あり、是君の遺されし所のものなれば、急ぎ携へ來りたりと云ふ、これを見るに封鍼元の如くなれば、驚喜の餘り路用に充てし金十六兩を與へて謝せしに、馬夫之を受けず、君の所有物を君に返すに何ぞ謝を受くべきの理あらんや、君が爲に夜を冒して來りたれば、賃金二百錢を得ば足れりとして、終に謝金を受けずして出去れり。

▲夏井の廉潔吏民の贈遺を受けず

紀の夏井讚岐守と爲る、政化大に行はれ、吏民之に安じて相欺くに忍びず、任滿ちて將に歸らんとす、百姓相率て闕に至り、留まらんことを乞ふ、更に留まること二年、民庶富み、倉廩實つ、是に於て新に大藏を其内部に造る、總て四十字櫃納して以て不動の蓄とす、去るに及び吏民の贈遺一も受くる所なし、都に歸るの後就て其家に送る、夏井唯紙筆を留めて其餘は悉く之を還す。

## 現代就職編

大周社編輯部編

### 第一 獨學者苦學者へ贈る言葉

#### 小學卒業生の進むべき道

尋常小學であれ、高等小學であれ小學教育を卒へた者は、實業に入るとか家事の手傳をするとかいふ者以外は、中等程度の學校に進むことが普通とされ、また教育を受ける順序からいつてもこれが正しい道であるが、境遇上かういふ道を踏むことを許されない者も尠くない。こゝに於て多くの者は迷ふのである。學校は卒業した——さあ、これから何にならう、何を目的として進まうか——この迷ひの聲は現今都會や地方を

通じて、餘りに多く聞く聲である。小學教育は本當の普通教育に過ぎないので、これだけを受けたのでは何の職業に就くことも困難であり、且つ現代の烈しい生存競争場裡にあつては、他の者に蹴落され振り落されてしまふのである。どうしても進んで高い教育を受けるか、特殊の専門的知識を得るか何れか一つの道を選ばなければならぬ。然も境遇上それが自由に許されない場合はどうするか。空しく大志を抱いて地に埋もれてしまはねばならないか。否、否、現代の社會はそれ程無慈悲ではない。かういふ人の進むべき道に、獨學と苦學の二つの方法があつて、これに依つて立派に目的を達し得られるのである。自宅にあつて勉強して實力をつける、それでなければ苦學して學校に通ひ目的を達する、この二つの方法の何れかをとることが現代に生きる良道である。

### 目的の撰擇を誤る勿れ

何れのことを成すにも目的を正しく定めることは重要であるが、殊に獨學者苦學者

にとつてはこれが必要である。その選定に就いては、第一に自己の才能を知ること、第二に周圍の事情を考へることである。「己れ自らを知れ」とは千古の金言であるが、自分は如何なる職業に適してゐるか、學問をするがよいか、技術に就くがよいかといふことを熟考して、自分が一番適當であると思ふことを選ばなければならない。たゞ他人の生活の有様を見て、かういふ職業は愉快である、あゝいふ職業は富裕であると考へ、自己の才能、力量も測らずにその目的に向つて進むことは無暴も甚しいといふべきであつて、心ある者の決して取るべき道ではない。吾々は社會の一員と生れた以上、自己の才能を最もよく發揮し、自己を正しく生かし、延いてはそれに依つて社會の幸福を増進せしめる一端となることが最も生甲斐のある生活といふべきである。單に虚名に憧憬れて自分の及ばない目的に向つて進めば、困難の度は加はるばかりで結局は、骨折り損の草疲れ儲けに終ることは明らかな事實である。

第二に自分の境遇を考へて目的を決定することである。自分が確かな目的を定めても、家庭の事情が許さない、兩親が反對だといふやうなことがあつては目的の達成に

骨が折れる。「なに、境遇に支配されては駄目だ、境遇を打ち破るやうな決心がなくはならぬ」と多くの少年諸君は元氣に委せて考へ易いのであるが、さういふことをしても決して好い結果が得られるものではない。例へば東京に出て勉強することが家庭の事情で許されないといふやうなことがあれば、徐ろに自宅にあつて勉強し、時の來るのを待つといふ風にする。「急がば廻れ」である。物事は凡て一直線にのみ考へて成功するものではない。それであるから、よく自分の周圍を顧みて目的を立てることが肝要である。

### 不斷の努力と熱火の如き意氣

いよいよ目的を定めたとすれば、その目的に向つて勇往邁進することである。獨學してやり遂げよう、苦學して成功しようといふのは所謂順境の道ではなくて、逆境の道である。逆風に向ひながら進むのであるからその間には險阻な道もあらう、怒濤の海もあらう、そこを切り抜けてこそ成功の榮冠は得られるのである。故に如何なる困難に遇つても挫折しては駄目である。それには「不斷の努力」と「熱烈火の如き意氣」を常に持つてゐることが必要である。「憂き事のなほ此の上も積れかし、限りある身の力ためさん」「艱難は汝を玉にす」——古い金言であるが何時味つて見てもよい言葉である。

多くの失敗者は此の努力と意氣が缺けてゐるのである。目的に到達しないうちに、到底自分の方では及ばないと諦めて、目的を變へてしまふ。「目的を變へる」といふことは一番よくない。折角途中まで築き上げた城を壊して、また新に築かうとするやうなもので、これでは幾年経つても完成するものではない。登山する時に阻しい道を踏み分けて汗を流しながら漸く頂上に辿りつき、はじめて今來た道を振返つて見る時ほど愉快なことはない。それと同じく、困難に打ち勝つた時の愉快さは、幾多ある愉快の中で最も愉快なものであることを知らねばならない。

### 頭惱は明快に身體は強健に

學校で受ける教育は、半ば先生が手傳つて、わからぬ所はわかるやうにして呉れるのであるが、獨學する者はさうは行かない。不明な點があつても助け船がないから自分で解決して行かなければならぬ。それだけ一層骨が折れるのである。だから頭は常に、ハツキリとして曇らぬやうにすることが肝要である。それには、つまらぬ妄想や雜念に迷はされたり、誘惑を受けたりしないことである。少年時代は一番心の變り易い時で、ともすれば色々な誘惑に引き入れられようし、當もない空想に酔ふやうなことがある。さうなると常に心が浮き浮きして來て勉強も手につかない。學校へ通ふ者と比較して數倍の努力をしなければならぬ獨學者が、そんな事では駄目である。常に心をシツカリと持つて、頭惱はいつも晴れた空のやうに明らかに、何を讀んでもよく頭にしみ込み、どんな六ヶ敷い問題にぶつかつても十分考へて解きほぐすといふやうにしなければならぬ。

それには、もう一つ大切なことは健康といふことである。

若い時代には兎角健康には注意しないものであるが、強健な身體でなければ勉強は

長く續かない。況して獨學苦學する者は、常に身體を無理に使つてゐるから健康をまじ易いものである。身體が強くなければ、如何に目的に達しようとして心で焦つても、その半ばにして挫折する悲運に遭遇することが多い。これでは折角の努力が水泡に歸してしまふ。吾々は常に健康といふことに注意して、自己の目的を生かして行かなければならない。

以上を以て獨學者苦學者に贈る言葉とする。

「最後まで戦ふ者は遂に勝利を得——この金言を胸に抱いて自己の立てたる目的に猛進せられよ。」

## 第二 小學卒業者の獨學苦學案内

### 小學卒業で中學校卒業の資格を得る法

中學校に五年間通はなければ中學校卒業の資格は得られないかといふに、現今では決してさうではない、小學校を卒業しただけで何處の學校に入らなくても中學卒業と全く同一の資格を得られる方法がある。それは文部省で毎年春と秋との二回に施行してゐる「専門學校入學者檢定試験」を受けて合格すれば立派に中學卒業と同じ資格を得られるのである。専門學校とか大學豫科とかに入學するには中等學校卒業の資格がなければならぬので、獨學者の爲に文部省がこの試験制度を設けてゐるので俗に「專檢」といつてゐる。つまりこの試験に合格すれば、高等學校は勿論、高等商業でも高等工

業でも受験する資格があるので、毎年此の試験を受ける者は五六千人に及んでゐる。

試験の科目は男子にあつては中學校五年卒業程度に於てその必須科目全部を試験する。即ち、英語(英文和譯、和文英譯)數學(算術、代數、平面幾何、立體幾何、三角法)國語(解釋、文法、作文、習字)漢文、博物(植物、動物、礦物、生理衛生、博物通論)物理、化學、歴史(日本史、西洋史、東洋史)地理(日本地理、外國地理、地理通論)修身、圖畫、用器畫、自在畫)體操、口頭試問、體格検査である。この科目だけは全部學習して置かなければならないから、小學卒業の學力で獨學でやり通さうとするには骨が折れるが、先づ勉強法としては、中學校の教科書を一年から五年まで買つて、參考書を便りにしながら順次に勉強して行く。その傍ら「中學講義録」のやうなもので力をつけるのもよい。若し夜間暇があるなら、次の章に記す夜間中學に通つて勉強するもよい。

此の試験は毎年四月と十月の二回に行はれ、問題は文部省の委員の出題にかゝるもので、全國統一に行はれる。たゞ試験場は各府縣にあるから東京まで來るには及ば

ない。試験施行の公告は試験のある日より約三ヶ月位前に官報で公告され、同時に期日、時間割試験場なども發表されるのである。此の試験は科目全部一度に合格しなくても、合格點に達した科目だけは合格證明書が下附されて次の試験にはその科目は受けなくてもよいのだから、やさしい科目から受けて行つて、二年三年とかかつて全部の科目の合格證明書をとればそれで合格したことになる。一寸考へると困難のやうであるが、かうして順次に受けて行く方法をとれば、大變六ヶ敷しいものではなく、現に毎年受験者の幾割かは立派に合格して、上の専門學校を受ける資格をとつてゐるのである。假りに高等の學校に入學しないとしても、専檢合格の資格を持つてゐれば社會に出ても小學卒業だけといふよりその實力を認めて呉れる譯で、萬事に好都合といふことが出来るのである。

### 獨學で實業學校卒業の資格を得る法

現在實業に従來し、又は將來實業に従事しようとしても、商業學校とか工業學校と

かを卒業してゐない爲に、社會に出て重用されないといふことは氣の毒なことであるが、さうかといつて色々な事情で學校に入れない者は澤山ある。かゝる人達の爲に、前に述べた専檢と同じやうに、文部省では「實業學校卒業程度檢定試験」を毎年一回全國統一的に施行してゐる。實業學校とは、商業學校、農業學校、工業學校などを指すので、この試験に合格すれば前記の學校を卒業したと同じ學力があるといふことが證明される譯である。然しこれは専檢と異つて上の高等商業とか高等工業とかへ入學する資格はつかない。たゞ合格證を持つてゐれば、會社へ雇はれるにしても銀行へ入るにしてもその實力が認められるから自分の立場が一層有利になる譯である。

この試験は毎年一回行はれ、時日は一定してゐないが、施行前三ヶ月前に官報に公告される。試験科目は工業學校の部(機械科、建築科)、農業學校の部(農業科)商業學校の部(商業科)の四科目である。然しこの科目はこれ丈に限定されてゐる譯でなく將來必要に應じて他のものも加へられることになつてゐる。なほ前記四科目の試験科目は左の通りである。



機械科——國語(講讀、作文)、英語(譯讀)、修身、數學(代數、幾何、三角法)、物理及化學、法制及經濟、材料及工作法、應用力學、原動機(熱機關水力學及水力機)、電氣工學大意、製圖、實驗及實習。

建築科——國語(講讀、作文)、英語(譯讀)、修身、數學(代數、幾何、三角法)、物理及化學、法制及經濟、建築構造、施工法及規矩法、材料及構造強弱、建築沿革圖書及製圖。

農業科——國語(講讀、作文)、修身、數學(算術、代數、幾何、測量)、法制及經濟(農業經濟も含む)、地理及歴史、物理及化學(氣象も含む)、博物、養蠶、耕作(作物、園藝、病蟲害、土壤、肥料、農具及農業、土木)、林業大意、畜産、實驗及實習。

商業科——國語(講讀、作文)、英語(講讀、作文、商業英語も含む)、地理(商業地理も含む)、歴史(商業歴史も含む)、理科、法制及經濟、修身、數學(代數、幾何、珠算、商業算術)、簿記(商業簿記、銀行簿記)、商品、商事要項及實踐。

受験料は一科目毎に金七圓。(例へば商業科を受ければ七圓で、農業科と商業科をうければその倍になる譯である)。この試験は一度に全科目合格しないでも、その中の一科若しくは數科が合格點に達してゐる場合にはその科目だけの合格證書が與へられるから、次回に受験する時はその科目は受験しないでよい。即ち、數回受験して全科に合格するやうにすればよいのである。

### 商業學校卒業と同一の認定を得る法

將來商業界に飛躍しようとして獨學で商業學の各科目を勉強して相等實力がついて來ても學校出身といふ資格がない爲に就職上非常に不利な場合がある。かういふ人達の爲に、主なる商業會議所が「商業學力檢定試験」を行つてゐる。この試験に合格すれば甲種程度の商業學校を卒業したと同じ學力があると認定される譯である。然し合格しても上級學校への入學資格はない。たと社會にその實力あることが認められるだけである。それだけでも有利であると言はねばならない。

現在此の試験を行つてゐる商業會議所は、東京、大阪、京都、神戸、名古屋、岡山、廣島、門司、高岡、仙臺、岡崎、札幌、函館、小樽の十四ヶ所で、毎年五月から十一月までの間に行はれるから受験者は志望する會議所へ照會して見るとよい。試験の程度は甲種商業學校卒業の學力で行ひ、科目は各會議所に依つて多少の相違はあるが、商事要項、商品學、商業簿記、商業算術、作文、習字などがその主なるものである。

この試験も前の專檢と同じやうに一科目でも合格點に入れば、合格證明書が交附され、次の試験にはその科目だけ免除されることになつてゐる。それ故、一度に全科目を受けなくてもよいので、數年に亘つて受験して全部の科目の合格證明書をとれば好い譯であるから最初平易なものから受けて行くとよい。準備としては、商業學校の教科書と實業講習録とかいふやうなもので勉強するがよい。

### 苦學して通へる夜間中學

夜間中學とは晝間中學校に通學することの出来ない者に高等普通教育——即ち中學

校程度の教育を施す所であつて、最近各地にこの夜間中學が増えて來た。これは獨學者諸君の爲に慶賀すべきことであつて、晝間、銀行會社や官廳に勤めてゐる者は、中學程度の教育を授けることが出来ない。夜間中學があれば、そこへ通つて教育を受け得られるのである。然し夜間中學は、晝間の中學と異つて、卒業しても中學校卒業の資格は得られない。まだ文部省が認可しないからである。將來に於ては認可されるだらうが、現在のところではそこまで行つてゐない。

夜間中學は苦學生諸君に如何に利用されるであらうか。それは大體四つに分けることが出来る。

- 一 晝間通學が出来ない者が普通學を學ぶため。
- 二 晝間の中學校各學年に編入試験を受けるため。
- 三 高等學校入學資格試験又は専門學校入學檢定試験を受けるため。
- 四 其他の試験(例へば文官普通試験の如き)を受ける準備のため。

それで右の第一に就いては説明する迄もないが、第二の編入試験といふのは、どう

いふ事かといふと、中學校に欠員がある時募集するので、これに合格すれば、受験した學年へ一足飛びに入學出来る。然し三年級の編入試験を受けるには二年級修了の學科目の試験に合格しなければならないので、獨學者は勢ひ準備の勉強がいる。そこで夜學中學に通つて勉強するといふことになるのである。

私立の中學では大抵、二年級、三年級、四年級まで行ふ。只五年級だけは、東京では行はない。試験科目は只英語、數學、國語、漢文だけの所もあれば、又此の他に一二科目加へる所もある。編入試験は四月の第一學期ばかりではなく、九月の二學期、一月の三學期にも行ふ。故に三年級に編入すれば、二ケ年で高等學校や大學豫科に入學する資格が出来る。又三ケ年で専門學校に入る資格が出来る。又若し四年級に編入すれば、僅か一ケ年で、高等學校に入學資格が出来、二ケ年で専門學校に入る資格が出来る。

次に第三は「專檢」などを受ける爲に夜間中學に入るのであるが、此の「專檢」は中學全科に亘る試験であるから、本當の獨學だけでは、中々困難である。中學の全科の教科書と中學程度の講義録や參考書とだけで勉強するよりも夜間中學へ通つて勉強した方が正則であり、又確實なのである。

さて東京の夜間中學校又はそれに相當するものに就て語れば、東京の夜間中學は十數校あるが、年限は三年、四年、或は五年と色々であるが、多くは三ケ年又は四ケ年で、五ケ年のものは二三である。苦學するものは、どうしても短期速成の必要のある場合が多いから、三ケ年或は四ケ年で、なるべく中學五ケ年の全科を修めさせようといふのである。一年級へは尋常小學校卒業程度の者は入學出来るが、二年級以上にも大抵皆缺員があるから入學を許す。一年級へは勿論無試験で入學出来るが、二年級以上は或は無試験で入學を許す學校もあれば、學歷だけで入學を定める學校もあり、又一年級修了程度の英語、數學などの二三科目の試験を行ふ所もある。

又入學の時期も、四月の學期始ばかりではなく、大抵學期がはりの九月一日にも入學が出来るし、尙學校によつては、其他何時でも隨意に入學が出来る所もある。要するに自分の希望の學年へ、何時でも入學が出来るから便宜である。入學金は一圓、授

業料は二圓乃至四圓で、授業は大抵皆午後六時から九時乃至十時迄である。

東京で最も古いものの一つで、又最も組織立つてゐるものの一つに、開成豫備學校といふがある。此の學校は中學科(夜學)と高等受験科(午後)との二つに分れてゐるが中學科が即ち夜間中學に相當するものである。この中學科は五ヶ年で一學級へは尋常小學卒業程度の者は無試験で入學が出来る。又二學級以上でも、缺員があるから、學力を檢定して無試験で入學を許す。次に東京に於ける夜間中學及夜間も授業する英語學校を記して置かう。

開成豫備學校(神田區淡路町一丁目四)

錦城中等學校(神田區錦町三丁目)

大成中等學校(神田區三崎町一丁目)

正則豫備學校中學科(神田區錦町三丁目)

茗溪中學(小石川區大塚窪町)

東京府立四中夜間中等學校(牛込區加賀町一)

東京府立五中夜學校(小石川區駕籠町)

第二東京市立中學夜間中學科(下谷區入谷町一四三)

豊山中學校豫備學校(小石川區大塚坂下町)

赤坂中等學校(赤坂區中ノ町)

早稻田中等夜學校(牛込區馬場下町)

牛込中等夜學校(牛込區横寺町三七)

京北中等學校(小石川區原町)

麻布中等夜學校(麻布區本村町四〇)

青山豫備學校(市外下澁谷常盤松御料地)

夜間中等海城學校(麴町區霞ヶ關)

成城中等學校(牛込區原町三丁目)

名教中等夜學校(市外代々木明治神宮隣地)

東京中等學校(神田區西小川町)

第二 小學卒業者の獨學苦學案内